

局教資育料

特228

45

第 二 輯



岩手縣教育會



始



特228
45



第二輯



序

昭和六年九月十八日、滿鐵線の爆破に端を發した所謂滿蒙事變は、我が帝國の生命線を著しくおびやかし、國運を睹して之が確保を爲さねばならぬ、第三者の介人を絶体に排撃して東洋永遠の平和を樹立せねばならぬ等々の國論高調し、全世界の啓蒙運動となり、一對十三の外交戦となり、その輿論にその行動に空前の緊張を示した。本縣も亦舉縣官民一致之に當り、後援・激勵・武裝移民並びに銃後の援護等に全力を傾けつゝある。しかも事件は、早急に解決の豫想つかず、持久的方策を採らねばならぬ情勢にある。此の時に際會し、係

累の近き本縣關係の時局資料を輯録して、以て學校、社會、
 家庭、教育の教材となすは、最も緊急で、最も有意義なる
 を認め、急遽之が編纂發行を試みる事とした。希くは漫然た
 る瞥見に終始せず、意のある所を諒察して、教育的利用の工
 夫に幾段の考慮を拂はれんことを望む。

丁東部未盡の平味、謝立、善、の國編高臨、全
 丁之、昭和八年九月、三香の介人、辭、將、
 事變、岩手縣教育會長、岩手縣教育會長、石、黑、英、彦、
 岩手縣教育會長、岩手縣教育會長、石、黑、英、彦、

報

凡例

- 一、本資料は、時局に關し、教育的意義あるものにして、而も、岩手縣關係のもののみを輯めたり。
- 二、本資料は、逐次完成を期し、第一輯は、主として縣關係文書より選叙したり。第二輯以下郷土兵歡送迎の情況及び郷土兵の戰況・慰問等の情況に及び以て縣人の對時局の行動——意氣——感情の發露を網羅せんとす。
- 三、本資料は編纂上、郷土兵を送る・陣中手記・陣中往來の三部に大別し、主に岩手日報より採録せり。
- 四、題名は、内容の中心を示さん爲、適宜編者に於て命題せるものなり。
- 五、文章は、殆ど原文のままとし、重複・假名遣・誤字等を訂正するに止めたり。

昭和八年九月

瀋陽の戦況………(一)
 はらば銀嶺の手と清流北上よ………(二)
 戦後の沈陽は一切引き受けた………(三)
 郷土兵出征を遂る………(四)

陣中手記

承德城一番乗り………(一)
 石甲鎮附近より懐柔に至る戦闘………(二)
 突込隊の號令一下壯快極りなき夜襲………(三)
 炎天百度の下に冬服で汗だくの戦ひ………(四)
 岩手健兒は強い古北口の快勝………(五)
 鴨潭中隊の奮戦三ツ望樓の攻撃………(六)
 羅文谷血戦録(その一)………(七)
 羅文谷血戦録(その二)………(八)
 小泉部隊盛岡工兵の偉業………(九)

陣中往來

萬里の長城上に笑つて死を覺悟………(七一)
 戦陣の初日の出を拜しつゝ………(七五)
 陣中第二の春を迎へて………(七六)
 山海關戦闘に對し感謝の電報………(七七)
 帝國の生命線を護りつゝ………(七八)
 東北健兒の意氣を發揚せむ………(八一)
 郷土の名を恥かしめさらむ………(八二)
 士氣愈々旺盛………(八三)
 山海關に於ける戦死者へ弔電………(八四)
 山海關に於ける名譽の負傷者重傷へ見舞電報………(八五)
 山海關に於ける名譽の傷者へ見舞の電報………(八六)
 死と心で沈黙の土を………(八七)
 瀋陽東門を舞臺に………(八八)

東洋の風雲遊歴七難し……………(九二)

高らかに朗らかに早く高歳を叫びたし……………(九三)

戦闘約四十回……………(九四)

電報文……………(九五)

在滿歩兵第卅一聯隊上等看護兵佐々木武志君の書翰……………(九六)

士族急×理髪……………(九七)

戦士の泣き涙……………(九八)

車外風景の感……………(九九)

奇蹟のまゝ……………(一〇〇)

山崎園蔵の遺言……………(一〇一)

戦中軍二の苦悶……………(一〇二)

朝鮮の戦日の出……………(一〇三)

朝鮮の戦日の出……………(一〇四)

朝鮮の戦日の出……………(一〇五)

朝鮮の戦日の出……………(一〇六)

朝鮮の戦日の出……………(一〇七)

朝鮮の戦日の出……………(一〇八)

朝鮮の戦日の出……………(一〇九)

朝鮮の戦日の出……………(一一〇)

朝鮮の戦日の出……………(一一一)

朝鮮の戦日の出……………(一一二)

朝鮮の戦日の出……………(一一三)

朝鮮の戦日の出……………(一一四)

朝鮮の戦日の出……………(一一五)

朝鮮の戦日の出……………(一一六)

朝鮮の戦日の出……………(一一七)

朝鮮の戦日の出……………(一一八)

朝鮮の戦日の出……………(一一九)

朝鮮の戦日の出……………(一二〇)

朝鮮の戦日の出……………(一二一)

朝鮮の戦日の出……………(一二二)

朝鮮の戦日の出……………(一二三)

朝鮮の戦日の出……………(一二四)

朝鮮の戦日の出……………(一二五)

朝鮮の戦日の出……………(一二六)

朝鮮の戦日の出……………(一二七)

朝鮮の戦日の出……………(一二八)

朝鮮の戦日の出……………(一二九)

朝鮮の戦日の出……………(一三〇)

朝鮮の戦日の出……………(一三一)

朝鮮の戦日の出……………(一三二)

朝鮮の戦日の出……………(一三三)

朝鮮の戦日の出……………(一三四)

朝鮮の戦日の出……………(一三五)

朝鮮の戦日の出……………(一三六)

朝鮮の戦日の出……………(一三七)

朝鮮の戦日の出……………(一三八)

朝鮮の戦日の出……………(一三九)

朝鮮の戦日の出……………(一四〇)

朝鮮の戦日の出……………(一四一)

朝鮮の戦日の出……………(一四二)

朝鮮の戦日の出……………(一四三)

朝鮮の戦日の出……………(一四四)

朝鮮の戦日の出……………(一四五)

朝鮮の戦日の出……………(一四六)

朝鮮の戦日の出……………(一四七)

朝鮮の戦日の出……………(一四八)

朝鮮の戦日の出……………(一四九)

朝鮮の戦日の出……………(一五〇)

朝鮮の戦日の出……………(一五一)

朝鮮の戦日の出……………(一五二)

朝鮮の戦日の出……………(一五三)

朝鮮の戦日の出……………(一五四)

朝鮮の戦日の出……………(一五五)

朝鮮の戦日の出……………(一五六)

朝鮮の戦日の出……………(一五七)

朝鮮の戦日の出……………(一五八)

朝鮮の戦日の出……………(一五九)

朝鮮の戦日の出……………(一六〇)

朝鮮の戦日の出……………(一六一)

朝鮮の戦日の出……………(一六二)

朝鮮の戦日の出……………(一六三)

朝鮮の戦日の出……………(一六四)

朝鮮の戦日の出……………(一六五)

朝鮮の戦日の出……………(一六六)

朝鮮の戦日の出……………(一六七)

朝鮮の戦日の出……………(一六八)

朝鮮の戦日の出……………(一六九)

朝鮮の戦日の出……………(一七〇)

朝鮮の戦日の出……………(一七一)

朝鮮の戦日の出……………(一七二)

朝鮮の戦日の出……………(一七三)

朝鮮の戦日の出……………(一七四)

朝鮮の戦日の出……………(一七五)

朝鮮の戦日の出……………(一七六)

朝鮮の戦日の出……………(一七七)

朝鮮の戦日の出……………(一七八)

朝鮮の戦日の出……………(一七九)

朝鮮の戦日の出……………(一八〇)

朝鮮の戦日の出……………(一八一)

朝鮮の戦日の出……………(一八二)

朝鮮の戦日の出……………(一八三)

朝鮮の戦日の出……………(一八四)

朝鮮の戦日の出……………(一八五)

朝鮮の戦日の出……………(一八六)

朝鮮の戦日の出……………(一八七)

朝鮮の戦日の出……………(一八八)

朝鮮の戦日の出……………(一八九)

朝鮮の戦日の出……………(一九〇)

朝鮮の戦日の出……………(一九一)

朝鮮の戦日の出……………(一九二)

朝鮮の戦日の出……………(一九三)

朝鮮の戦日の出……………(一九四)

朝鮮の戦日の出……………(一九五)

朝鮮の戦日の出……………(一九六)

朝鮮の戦日の出……………(一九七)

朝鮮の戦日の出……………(一九八)

朝鮮の戦日の出……………(一九九)

朝鮮の戦日の出……………(二〇〇)

朝鮮の戦日の出

郷土の將兵を送る

郷土の將兵を送る

郷土の將兵を送る

けふは、郷土出身の弘前歩兵部隊が、この岩手の山野を離れる日である、酷寒の満洲を指して。何といふ勇ましき光景であらう。その間、入營したばかりの郷土の兵隊は、早くも立派な軍人となつて「敵よ、來れ」といふ決心を眉間に見せて「郷土の人達、行つて來るよ、安心せよ」と云つて居るではないか。颯爽たる姿、氣は既に極東を呑んで居る、頼もしい事だ。驕頭に見送る人達はどうか、老も若きも男も女も、手に日の丸の旗を持つて、萬歳々と聲を限りに叫んで居るではないか。忠孝兩全の國、日本でなければ見られぬ景觀である。之あればこそ世界無比の強兵であり、滿洲國を支援し、極東の平和を保持し得られるのである。

將兵各位、諸君の心が躍るであらう。正義人道の爲に、滿洲の野に渡つてゆくのである。男と生れた本懐、此上もない事だ。向ふには軍旗が待つて居る。○團長も、○隊長も、諸君の來

るのを遅しと待つて居るのである。三千万の満洲の國民もどんなに諸君を待ちあぐんで居るだらう。

二

満洲は寒いぞ、油断はするな。然し諸君と我々の先輩は、日露の役に矢張り、かういふ酷寒に、黒溝台・沙河と戦つて、奉天の會戦を有利に展開せしめた歴史がある。さればこそ、此度諸君は選ばれて大命を拜する事になつたのだ。同じ軍人でも諸君は何といふ名譽な事であらう正に郷土の誇りであり、光榮でもある。そればかりでない、既に一昨年、満洲事變突發するや我々の鈴木○團は、逸早く北滿チチハルに特派された。更に西○團の渡滿となり、今や奉天から山海關に至る何百里の間の警戒は、我郷土兵に任されて居るのである。實に我か生命線の第一線は、我が郷土兵である。一隊は朝陽寺に在つて、熱河を睨みつけて居る。一隊は、山海關を占據して、北平を押へて居る。諸君も、恐らくこの大任につくものと思ふ。今日は、その晴れの門出である。諸君は、日本を脊負つて起つのである。また満洲國を育て、やるのである。

極東の瘤を取去つてやるのである。世界の平和を固めてやるのである。正義公道の爲に、干を取るのである。天地神明も照覽ある筈だ、それをどうだ聯盟は、支那は。

日本は、條約規約に反するとて、不法なる勸告を我國に發せんとして居る。小學校の子供に迄抗日排日を植ゑ付けて、一人残らず日本人を滿蒙から追つ拂はんとしたのは誰か。滿鐵の破壊は誰か、權益の蹂躪枚舉に違がない。日本人ならずとも、自衛上、その暴慢不羈を膺懲せずんばあるべからざるものである。况んやロシアは、北より赤い手を伸ばし、支那の亂脈、到底滿蒙の治安維持に任ずる事は出来ない。之をしも傍觀するならば、遂に極東は、世界渦亂の舞臺となる事は豫想に難くない。皇軍の起つた所以は、實にこゝにあるのである。それを否認する聯盟は何處に良心を有し、何處に認識をもつか諒解に苦しむ。

又、日一日と、發展し進歩して行く滿洲國を承認する能はずといふ聯盟、滑稽も甚だしいではないか。而も、米露を入れて、日本を牽制せんとして居る。一体、聯盟は、何を目標として

三

居るのか判断に苦しむ處である。必然の歴史あり、意義のある滿洲國をやめてどうせよといふのか。野蠻から明朝の滿蒙になつたのを、又、暗黒にせよといふのか、卑怯なる聯盟の態度ではないか。平和々々といふけれども、日本の取る平和への途の外に、何があり得るか、五十何國かゝつても、愚かにもつかぬ空論を放送して居るに過ぎない。我等は、信するまゝに進むのみだ。脱退も何か辭せん、國が焦土と化すとも邁進あるのみとはこゝだ。

誠に國家存亡の岐路に立つ日本である。此の大義の爲に生死を超越して、滿蒙の野に銃をとり、馬を進めて、萬里の長城高く日章旗を翻すやう願望してやまぬ。畏くも陛下は、汝等軍人を股肱と頼むぞと仰せられた。生命線は最後の線だ、こゝを退いては日本はない。しつかり頼みましたぞ、勳を立て、歸つてくる凱旋の日を、百萬縣民は今から神に熱禱して怠るまい。こゝに縣民と共に赤誠を披瀝して歡送の辭とす。(昭和八年一月廿七日―岩手日報)

滿洲派遣兵を送りて

今次、派遣師團の増加要員たる將兵並に新入營兵を、滿洲に派遣するに方り、官民各位の熱烈なる鼓舞激勵と、深厚なる歡送後援を辱うしたるは、誠に感激に堪へぬ所で、衷心感謝する次第である。

特に初年兵が、入營直後長途の輸送を以て、第一線に差遣せらるゝ事は、未曾有の壯舉であつたが、志氣極めて軒昂、而かも秩序整然であつた事は、一に皇軍意識に目覺めた結果であつて、遺憾なく質實剛健なる東北健兒の本色を發揮し、流石に非常時に於ける壯丁に相應しい決意の表徴であつて、御同様力強く感ずるのである。

吾人は、官民各位と共に、將兵一同、海陸無事任地に安着し、西〇團長の麾下に入らん事を念願する次第である。

現下帝国内外の情勢は、寔に多事多難、寸時の苟安を許さぬものあるに鑑み、益々戮力協心
軍民一体の實を擧げ、將に滿蒙に關する認識を新にし、愈々將士の慰問並に遺家族の救恤等銃
後の支援を徹底し、將士をして勇奮國防の第一線に活躍し、皇道を中外に宣布すると共に、東
北健兒の特色、我が〇國の榮譽を發揚せしめられん事を切望する次第である。

一月二十八日

留守司令官 原 田 中 將

今回盛岡部隊を率ゐ、武門の譽たる晴れの征途に上るに方り、郷土各位の熱烈なる御
後援に對し、衷心感謝の意を表すると共に、益々東北健兒の意氣を發揮せむ事を期す。
岩手毎日新聞を通し、訣別の辭となす。

滿洲派遣部隊 上 原 大 佐

盛岡部隊歡送會

四縣知事及び盛岡市長主催の盛岡工兵部隊渡滿將兵歡送會は、一月二十三日、午後二時半よ
り縣公會堂に於て

石黒知事 市瀬旅團長 田村西村兩聯隊長 中村市長 前田内務 森部警察 湯本學務三部
長 松本少將 細川町村會長 赤澤市會議長等出席

壯途につく上原部隊長鴨澤大尉以下下士兵を迎へ、湯本學務部長の開辭を述べ、次いで君ケ
代奉唱、石黒知事別項挨拶を述べて激勵し、下士兵一同を代表し、笹田曹長は

「私共はこの度、大命を拜し、渡滿することになりました。ついてはかく盛大なる歡送會を催
し下されまして、一同感謝に堪へません。渡滿の上は、任務達成に死力を致す決心であります
各位御安心願ひます。」

と、感激の答辭を述べ、上原部隊長は又部下のため

「長官のお言葉により、私共銃後の憂ひは一掃致されましたが、私共は、尙重ねて銃後の御後援をお願いして置きます。」

と、謝辭を述べ、石黒知事は、一々各兵に激勵の言葉を與へれば、元氣一ばいの兵士諸君は、知事を胸上げて感謝の意を表し、意氣は天を衝く勢であつた。兩街五十余名の美妓座間を斡旋し、盛岡小唄・からめ節の餘興あり。最後に知事の發聲で、兩陛下の萬歳、市長は盛岡部隊、上原部隊長は、岩手青森秋田山形及び盛岡の萬歳を三唱、一同唱和し、四時閉會した。

盛岡工兵部隊將校歡迎會は、二十三日午後五時半から、縣公會堂第一ホールに、四縣知事盛岡市長主催となり、主賓上原部隊長以下各將校を迎へ

石黒知事 市瀬旗團長 上村高農校長 若林地方裁判所長 石塚檢事正 松本少將 中村市長 前田内務 森部警察 湯本學務三部長 西村・田村兩騎兵聯隊長 鈴木巖雄氏等官民二

百餘出席

湯本學務部長の開辭あり。君ヶ代奉唱、主催者を代表し、石黒知事歡送辭を述べ、鈴木巖氏は「工兵部隊の出勤に際し、私は故南部中尉並に故横川省三君を想起する。兩氏は、骨を滿蒙の野にさらした、そして滿洲と岩手を結びつけたものである。兩氏の靈や有事の際果して如何。

市民の一人として、工兵部隊の渡滿を祝し且激勵す。」

上原大佐は「大命を拜しまして、隊の主力は渡滿することになりました。まさに東北健兒の勇を中外に輝かすの秋が参つたのです。微力果して各位の御期待に添ふや否や。私共はたゞ身命をなげうつて君國に盡すの一途あるのみです。私は、在任五年苦業を共にした將兵一同と行を共にし得ることを欣快とします。銃後は呉々もお頼み致します。」

と、丁重に謝辭を述べ、この間渡滿將校は一同起立して謝意を表し、終つて宴に移り、萬歳を三唱し七時半會を閉じた。(一月廿四日―岩手日報)

山河遙かに征途へ

10

怒濤の如き萬歳歡呼の聲に送られて、二十七日午前九時十五分、弘前驛を出發した精鋭なる郷土兵早川派遣部隊は、紅顔激湍はち切れんばかりの旺盛なる元氣を見せて、津輕平野を一踏滿蒙の天地に向つて驍進した。弘前市よりは、工藤市會議長・谷口助役・兵事主任等が名物弘前リンゴ數十箱、別れの煙火一千個を慰問品として積み込み、青森驛まで見送つた。此の日快晴だつた天候は、青森に近づくとや烈風吹雪と化し、酷寒肌を刺す様な悲壯極る光景となつたが通過各驛には可愛らしい小學兒童迄血の様な日の丸の國旗を打ち振り、熱誠こめたる歡送で、將兵何れも感激の面持である。

列車はすべるが如く午前十時十五分、青森操車驛に到着すれば、北山青森市長田中與市氏・柳庶務課長・清水青森歩五留守隊長北原・青森聯隊區司令官外數千人の見送りあり、青森浦町驛に

は多久青森縣知事・近藤内務部・矢野學務部長外各學校生徒市民の熱烈燃ゆる歡送を受けつゝ東北本線に移り愈々本縣目指して進行を續ける。

兵は、郷土の山河を待ち切れず車窓を眺めてゐる。やがて午後一時二十分、尻内驛に着。吹雪益々強くなつて來た。驛頭には神田八戸市長・富山縣議・市會議長外各中學校小學生の群集はホームに溢れるばかりの盛況を呈した。

茲には宮原司令部付中佐外本縣人多數出迎へあり、僅か八分の停車で、我子の姿に會ふべく父母近親がアツチコツチ探し廻りヤツト見つかつて頬すりして別れを惜む情景は、全く涙ぐましい場面を展開した。

熱狂せる群衆は「こゝは御國の何百里」を聲枯れ切れる程叫んでゐる。斯くして本縣に刻々近くと、各驛からは慰問品が續々持ち込まれ、將兵の意氣は益々高潮に達して來たが、輸送指揮官より嚴格な訓練を受けただけあつて、沈着全く動ぜざる姿を見せず、岩手健兒の特徴は遺憾

なく發揮された。

午後二時二十分、岩手の山河——金田一驛に入る。勇士の胸は高鳴り、士氣衝天、懐かしの郷里はどう彼等兵隊サンに見えたらう、感極まつて雀躍、筆舌に表せぬ光景だ。金田一は通過し、豫定の所思ひ掛けない列車の都合で三分間停車、我子の名を呼びつゝ、車窓に駆け寄り、ヤット面會出來て父母は何もかも忘れて涙のみであつた。一時やんだ吹雪は又猛烈を極め、勇士を送る首途を益々盛んならしめた。

熱狂の渦巻を展開して北福岡を過ぎ、一戸に到着。ホームは勿論道路迄全く立錐の餘地ない程歡送者黒山をなし、一戸町長を首め町會議員各團體、其の他福岡中學校・女學校・小學校・郷里青訓生數千、軍歌萬歳の聲天地も碎けんばかり。赤い徽章をつけた面會の父母近親は、郡衆をかき分けて我子を捜す「お父さん、お母さん」「オウ、元氣だつたか、しつかり頼むぞ」「大丈夫です、御達者で」と交す言葉の中に胸の涙はこみ上つて來る、握つた手、寄

せた顔は何時迄も離れなかつた。弘前驛出發以來、かく悲壯な場面は始めてだつた。

一戸町・福岡町より山と慰問品が積まれる。女子青年團は、湯茶の補給、この時福岡中學生村木君より血染の「奮闘望む」と血書された日の丸の國旗一旒を贈呈され、平柳少佐感激し「この意氣だ」と打ち振る。八分間の停車は餘りに短く涙の乾かぬうちに、列車は再び二時四十九分、軍歌の聲陣太鼓の音、老若男女死物狂ひの歡呼に萬感胸にこもつて出發す。霧進南下する列車の前に展開する山河草木、總ては思ひ出となる。やがて秀麗な岩鷲山が優姿を現はす頃吹雪がやんで西に傾いた陽光サツと童顔を輝かす、列車の中はドン／＼電報や激勵の手紙が益々盛んに舞ひ込む。各兵隊サンは、この返事や挨拶に忙殺されてゐる。盛岡に近づくに従つて感激の場面は愈々高潮、歡送の兒童や女學生等よりあらゆる激勵の文を連ねた國旗が盛んに窓より投げ入れられ、列車は赤い國旗で一杯だ。しかし兵隊サンは嚴重な御達しで旗を振ることが許されず、擧手の答禮をしてゐた。

四時十五分好摩驛停車……石黒知事・湯本學務部長・國崎聯隊區司令官其の他多數出迎へた。此處は四分の短い面會時間、ヤット我子を見付けた時は既に發車時刻が到來し、漸く手を握つた位で中には搜し得られず、狂氣の如く泣きくづれるお母さんさへあり、餘りにも悲壯なシーンであつた。石黒知事は、好摩より同車して元氣溢れる各列車を平柳指揮官の案内で訪問。將兵〇〇〇名全員に堅い握手をし乍ら『元氣で行け、家族の事は心配するな』と心から激勵する。兵隊さん、感極つて總立ちで、萬歳を連呼する、其の意氣や日本魂の發露『滿家何物ぞ』決死の意氣だ。四時四十五分、厨川驛停車、遠く土淵・黒石野の山間より小學兒童が一齊に肉弾三勇士を連呼する父母と面會の狀況は涙なくしては見られぬ。此處で夕食兵糧が積まれ、愈々北上平野を突進して杜陵の都に向ふ。夕闇迫り、寒氣募つて來た同五時十三分、點々燈された晴れの盛岡に未だ曾てない猛烈な歡送を受けたのである。

(一月二十八日—小笠原岩手日報社特派員記)

萬歳と歡呼の怒濤

無慮一萬を超える見送りの群衆、盛岡驛上り下り兩ホームから雪の線路に至る數町蟬蛻と涯しなく續いた感激の見送りの人々、千切れるばかりに振られる小旗、高らかに唱ふ陸軍々歌身動きならぬ人垣、二十七日夕方の盛岡驛頭は熱烈火の玉のやうな盛岡市内外各方面の熱狂的な見送人で、早くから歡聲の嵐が捲起つた——夕方五時、わが郷土兵〇〇〇名乗車の軍用列車が、四邊の歡呼の嵐の中をスル／＼と音もなく驛ホームに入つて來た。全十二輛の各列車の車窓には、若きわが郷土兵の眞剣な顔が折重つて積み込まれてゐる。見よ!!その顔、その顔!!窓際には第〇〇中隊何某と夫々貼札を出して熱心に親兄弟の家族を探し求める骨肉の情に堪へられぬ若き兵士の顔々、期せずして起る萬歳萬歳の聲、老いも若きも男も女も胸も裂けよと叫ぶ萬歳の嵐、斯くて列車が停車すると、窓にブラ下がる様に訣別の辭を告げる家族の人々、十七八

歳の田舎の女の子、兄貴を探し出して感激の握手、赤い襦袢の腕もあらはに「兄サン兄サン」といつまでも手を離さぬ、兄貴の目には涙が光つてた。「ウン、よしよしつかり働いて来るぞ。」あつちでもこつちでも揉み合ふ人波、息子を呼ぶ母の聲、押し潰される様な激しい嵐だ。一方に起る軍歌の音楽隊、萬歳の吹雪、小旗の波と歡呼の嵐が驛頭を揺がして血涙の激勵が飛ぶ。發車ベルが鳴り出した。汽笛一聲榮えある軍用列車はしづくくと動き出した。將士の健康な顔が窓に溢れた、かくて岩手の健兒が故國の榮譽を双肩に、萬雷の歡呼に送られて、山河幾百里遙かに壯途に上つた。(一月廿八日、岩手日報)

盛岡驛歡送風景

石黒知事並に同夫人の熱誠溢るゝ歡送並に歡送の辭に、渡滿諸兵はスツカリ感激し、盛岡通過の各渡滿兵は

「知事閣下、必ず皇國のため重大なる任務を全うして來ます。金鷄勳章は必ず頂き、我が岩手縣のために充分なる活躍をなして來ます。」

と何れも朗らかであつた。尙知事は、通過毎に、既に見送り出身兵と握手するので、兵士達は「知事閣下、私にも握手をして下さい。私は〇〇村の百姓の子であります。知事閣下と握手するのは無上の光榮であります。」

と、驛における場面そのまゝ。(一月廿八日―岩手日報)

さらば銀嶺岩手よ清流北上よ

勇躍の東北健兒、上原部隊は愈々本二十五日午後十時二十分、盛岡驛發晴れの壯途に着く。一夜の夢も只興奮と感激に破られて、今日午前中の最後の教練に、軍装も凛々しく高鳴る胸を鎮めかね、意氣既に滿蒙を呑み、腕は鳴る、眞に大和魂の武者振ひである。正午營庭に於て留守隊とサラ／＼雪の中で机を並べて冷酒にするめ・みかん・赤飯で最後の畫食を共にし、親しく彼の地の話や此方の話を語り合ひ、且つ勵み勵まし、最後に乾杯を交し、萬歳を三唱して和氣霽々裡に午後一時終了し、午後から休養して六時、銀嶺輝く岩手の山、懐しの營舎に別れを告げて出門。威風堂々市街行進を行ふのである。この出發に際し、不來方城下の六萬市民は心から歡呼の聲を揚げて、歡送と武運長久を祈るのである。(一月廿六日―岩手日報)

銃後のことは一切引き受けた

—石黒知事談—

滿洲問題の勃發と共に、昨年遂に、我々の尊敬する第八師團の縣出身兵が出征し、各地において大いに奮戦力闘し、まさに滿洲中部一帯の治安維持に貢献し得たことは誠に感謝に堪へぬ最近更に熱河事變によつて、對支問題が喧しくなり、ために國際聯盟まで異狀の緊張を示してゐる場合、第八師團の將兵を滿洲におくることは一種壯烈の感を抱くと同時に、眞の東洋平和確立が今後にあると思はれる。臥薪嘗膽、萬古不拔の精神をもつて行かれ、東北健兒の意氣と祖先傳來の堅き魂を練りに練つた身體により、陛下の赤子として十二分に國家のため、東洋平和のため神明の加護により極力奮闘され、名譽の凱旋をのぞむものである。銃後のことは、よく縣民が同情と尊敬をもつて當り、將兵のため十分の奮闘をさせねばならぬ。(二十三日岩手日報)

郷土兵出征を送る

睦月むつきの風烈々と星かげの冴ゆる今宵を勇士は立たす
 勇士の姿見えねどはた重なす人垣の蔭に我は歡呼す
 群集が打ち振る小旗提灯の灯の光流る驛をうづめて
 風荒ぶ北滿に今を門出なる勇士の姿悲壯にぞ見ゆ
 目出度凱旋あれと人波の中に立ちつゝひた祈らるる
 みなぎらふ人波ぬちに悲壯なる心となりて見送る我れは

村井敬子（岩手毎日新聞）

承德城一番乗り

後藤少尉手記

【承德にて小原特派員發】熱河討伐の第一歩は、實に吾が早川部隊であつた。また承德一番乗りは、河原挺進隊に配屬された盛岡工兵部隊後藤少尉の率ゐる一隊のトラックであつた。誠に熱河討伐赫々たる武勳、岩手の譽れ是に過ぎたるものはない。十日承德を出發、樂平に向ふ行軍中、當分早川部隊に配屬された後藤少尉は、その一番乗りの手記を記者に托した。

義州——朝陽自動車道の補修を命ぜられた工兵隊は、大隊長を先頭に工事を實施しつゝ、朝陽道を前進し、或は高原の大吹雪の中に必死の作業を續け、或は積雪の路傍に睡魔を凌ぎ、二十五日朝、やつと朝陽に入つた時は、既に友軍の占領する所となり、廣い城内の道路は自動車と馬車に埋まつてゐた。敵の顔を一度も見ず、朝陽に入城した我々は、實に脾肉の感に堪へなかつた（何の爲めに我々は此處迄來たのか）と大いに悲憤した事務兵もゐたが、突前吉報が賣らされた。

第二中隊、は川原挺身隊に配屬を命ぜられ、自動車に分乗し、三月一日早朝出發、八十里の彼方承德を目指し、僅か四日間を以て當面の敵を蹴散らし、一舉奇襲により、敵の後方を擾亂せんとする、實に痛快極まる一大壯舉に加はる事が出來た。大隊長の訓示も遂に涙となり、我々も亦決死の覺悟を肩宇に漂はした。かくて一日早朝出發した我々は、第一日、十數里を踏破して、午後三時頃、遂に渡滿以來、初めて敵彈の洗禮を受ける事となつた葉柏樹の陣地攻撃だ。敵彈は飛雨し、迫撃砲彈は、物凄く頭上に炸裂した。我々は十七聯隊の軍旗と共に第一線に近く前進した。第一線陣地は、約一時間にして突破する事が出來たが、敵は第二第三の陣地を利用して巧みに戦つた。戦闘は遂に夜に入るも續けられ、我々は零下二十八度の山上に一夜を明かした。彈の亂れ飛ぶ山上の一夜「カンメンボ」をかじり乍ら寒さに泣いた此一夜こそ、我々が初めて戦地だと意識した程苦痛の一夜だつた。

午前三時頃、第一線部隊は敵陣地を陥し入れ、葉柏樹部落の夜襲に移つた夜も明けやらぬ二日早朝、食事準備も中途に急速な追撃に移つた。睡魔は襲ひ來て敵も忘れ、兵は車内で居眠りを續けた。余は第二中隊最古參小隊長として、最先頭にあり、常に敵狀の監視を續けた。丁度自動車の縦列が凌源の前方に來た時、突然真正面より連続的な迫撃砲の猛射を受けた。直ちに山砲は應戦し、歩兵は散開して攻撃した。交戦後約一時間、逃げる敵を追つて、凌源西端に出た時は午後一時頃だつた。此處でもう一食分しか残さぬ「カンメンボ」を半食分食して餓をしのいだ。戦闘には強い日本軍も、支那兵の逃げ足には追いつかない、實に敵乍ら見事な逃げぶりだ。「カンメンボ」をかじり乍ら又車上の人となつた。これからの追撃は實に痛快そのものだつた。装甲自動車二台を先頭にして、急スビートの追撃、敵は逃げ場を失ひ、バタ／＼と地上に倒れた。數里に亘る山間道路は、死骸に埋められ、迫撃砲、機關銃は幾多遺棄せられ、其の彈藥のみにも何百萬を算した事か。死に切れぬ敵は軍刀の露と消えた。斯くて凄慘極まり

なき二日の夜を暮し、追撃は依然続けられた。百數十台の自動車の氣味悪い射撃を耳にしつゝ、いつか深い眠りにおちていつた。

明くれば三日午後一時、平泉を立ち、別に大した抵抗も受けず一小部落に一夜を明す。四日永久に紀念すべき我等が承德の一番乗りの日、前衛に配屬せられた第二中隊より、更に余の指揮する一ヶ分隊（上宿軍曹の分隊）前衛に配屬を命ぜられ、尖兵の直後を前進した自動車大縦列、第三臺目に出た我々は思はず歡喜雀躍して承德に近づくに従ひ、敵は増加した。我々は尖兵と共に散開して戦闘し、逃げる敵を猛進進撃した兵は、實に勇敢に戦闘した。遵つて指揮官のハラ／＼する事が多い位だつた。承德の前方谷地に我々の自動車走り込んだ時、前方高地より砲を有する數百の敵の猛射を受けた。四方の山上よりの射撃を受け、隠れ場のない我々は最後の腹をきめて戦闘した。四輛目からは自動車續かず初期我々は孤軍奮闘した。

やがて後續部隊の到着と共に工兵は、第一線に出で、障碍の排除に努め、第一線の山上占領

と共に橋本尖兵長の指揮する二ヶ分隊と、余の指揮する工兵分隊の三輛は、單身承德目指して突進し、敗殘兵には目もくれず青年將校の意氣はこゝぞとばかり自動車を疾驅した。山を下ると、すぐ承德の市街が眼前に展開したが、僅かの兵力を以て承德に入る事は、この上もない危険な事だつた。余は在校間支那語を研究せる關係から、支那語には若干の自信があつた。余は同期生である橋本尖兵長と協議し、支那人を捕へて尋問した。湯玉麟は昨日樂平に向つて逃げ、現在承德には支那軍なきを知り得た。しめたツ、萬事OKとばかり無謀にも三輛の兵力を以て、承德の市内に突進した。市内を彷徨せる支那兵を捕へては武装解除しつゝ、承德西端に出でた時は午後一時十五分だつた。かくて完全承德は我手に歸し、後方部隊は續々入城した。日本軍の通過した部落は直ちに日滿國旗によつて埋められ、民は安んじて商についた。承德の市外も逐次活氣を呈し、街を走る支那人の顔にも憂色はなくなつて居た。

石甲鎮附近より懐柔に至る戦闘

二六

早川部隊 市川中尉手記

古北口南方新開嶺附近に於て、南方軍八十三師・二師・二十五師・三師を打ち破つた我が西
○團は、正に決河の勢ひ、一時石甲鎮東西の線で攻撃を準備したが、再び行動を開始し、五月
十八日午後より、南省壯東西の敵陣地に對し攻撃を開始した。
早川部隊は、依然右翼隊の右聯隊として、敵の左翼方面の攻撃を擔任し、十八日午後三時兵
馬營出發、第二大隊を追撃隊として前進を起した。二三日前より、土民の言斥候の報告等によ
り、敵は我に威壓され、逐次退却を始めた様子だったので、第二大隊は勇敢に急進し、午後六
時半、最後の收容部隊約百五十と衝突、此に十八日の戦端は開かれたのである。

前面の敵は、二十五師の一部で、我が部隊の進路が直接密雲の北側に迫つてゐる關係上、掩
蓋銃坐によつて頑強な抵抗を續け、薄暮を利用して、近接する追撃隊に對し、猛烈な射撃を浴
せかける。然しもう闇夜に鐵砲の時になつてゐる。徒らに唸りを立て、頭上をかすめるばかり
だ。午後九時頃から、逐次銃聲が少なく、正午頃には單發音を聞くのみとなつた。勇敢なる斥
候の潜入により、敵の退却開始は愈々確實となり、部隊は斷乎夜間追撃に移つた。鐵條網や深
い阻絶壕を利用し、少數の敵は抵抗を試みるが、我が急追にたまりかね、午前三時半には早や
敵陣地帯に進み、續いて追撃前進に移つた。敵の大部は、夜半に退却したるが如く、天漸く明
くる頃には全く敵影を見ず、聯隊は豫定の進路を直路密雲北側白河左岸に進み、難なく密雲古
據の戦闘を終つた。

二七

戦を決したのか、懷柔附近の陣地だ。二十二日出發の命令を受け、聯隊は午後六時宿營地韓各谷庄を出發した。

二

敵は今まで姿を見せなかつた山西軍である。第五十九軍と銘打つて出たが、實力は一ヶ師に過ぎない。軍長傅作義はたく州城に一月の籠城を續け、奉天軍をして遂に攻撃を斷念せしめた有名な武將だが、打續く支那軍の敗戦に、どれだけ抵抗をするか、興味ある問題だつた。此の敵に對し、師團は鈴木○團を攻撃の主体とし、東南方よりする反撃に備ふる爲、川原○團を密雲南方地區に集結させた。鈴木○團長の攻撃計畫が又振つてゐる。即ち○團の半分を全然敵の背後に廻さうといふのだ。此の任務を受けたのが我が早川部隊である。

何時でも迂回部隊の行動は、困難を伴ふものだ。況して敵の豫期せぬ山奥からその背後に出ようとするのだから、聯隊の行軍も並大抵ではなかつた。包圍企圖を秘匿する爲、夕刻に行動を開始し、支那兵には珍らしい森林地帯を前進、沙漠の様な砂地の道路を土埃を立てない様に

注意しながら、懷柔北方の山地帯に進んだ。谷の入口に進んだ頃は、日も全く暮れて只星明りに足下を見透し得る程度だつた。



夜が更けていくにつれ、睡氣がさしてくる。ボンヤリして歩くと谷川に落さうになる。角のとがつた石に躓きながら進む。人が通れても馬が進めない急な崖にぶつかつたり、巾廣い溝に遇つたりする度に、鴨澤大尉の工兵隊が、山砲隊の爲に工事をする平柳大隊の前衛も、幾度か止まつて之を援助した。

谷が盡きると、大きな峠が我々を待つてゐる。暗闇に息吹きながら、前の者の足取りを眞似て上る。實に非道い道だ。その爲豫定に遅れて二十三日午前五時半、目指す敵の背後に出た此處は山の出口である、敵はと見ると、前の丘にも一つも見えない。時々速く懷柔方面で砲聲が聞えるが、豫想した敵の左翼方面は實に靜かなものだ。

三

飛行機が、通信筒を落して、敵は逐次退却を始めたと報じた。扱は逃がしたかと早川部隊長以下皆口惜しがる。兎に角早く進めといふので、前衛が隘路を出ると千五百米位前の高地から敵の射撃を受け「よしッ、之で敵も攫へることが出来るぞ。」と一同の志氣頓に昂り、夫々敵情の偵察を始めた。此の敵は、我が隘路進出を妨害する爲、可成り猛烈な射撃をする。兵力は五六十名位なものだが、距離が近いので、その弾丸は我々の行動を妨害すること甚だしい。この敵にかゝつてゐては大きな敵を逃がすといふので、聯隊長は、山砲第〇〇隊（野砲〇〇〇編成せるもの）協力の下に、第〇隊廣瀬小隊をして攻撃さす、聯隊は遠く敵の背後山里庄（懷柔から西南方一里半）に前進を始む。然し敵は逐次兵力を増し、遂に該高地脚の部落に百五十名位現はれ、我が前進を妨害しようとする、次で出たのが第〇〇隊（石田大尉負傷不在のため井土中尉指揮）である。

之等の部隊は、砲兵協力の許に聯隊前進の反対方向から攻撃し、敵を引きつけてしまふ。

その間に聯隊主力は、完全に隘路を出て敵主力の背後に向つた。かくと知つた敵主力は、その一部で我に抵抗せしめ、主力は高地に遮蔽してどん／＼退却を始める。遅れてはたまるものと前衛たる第一大隊の前進も早い。この頃、生意氣にも敵が山砲を、我々の方に向けて撃ち出した。慌て、撃つてゐると見えて、砲弾は頭上高く飛んでいつて、我が後の方に間抜けた音を立て、地煙を上げてゐる。之を見つけた山砲第〇〇隊長（〇〇〇編成のもの）石橋中尉は小癩な奴と、射向を之に向ければ、御手並鮮かなもの、忽ち砲煙で敵砲兵を包んだ。眼鏡で見ると馬が暴れて奔放する、砲車に弾丸があたつて車輪が外れる。

敵は山砲を捨て、逃げ出してゐる、日本の砲兵は確かに上手だ。この間に、前衛は敵の退却路に迫り、高地上からは猛烈な射撃を始めた。第〇〇隊（宮崎大隊）もその右に出され、森林

に遮蔽して敵の間近に迫る。我が前面を退却してゐるのは敵の左翼陣地にゐたものだ。約千名はゐたらう。村にかくれ、森林にかくれ、西南方に退却する、まるで蟻の巢をつゝいて追ひ出した如く、散りくばらゝゝになつて逃げる。我は山砲は勿論・機關銃・歩兵砲・輕機關銃等あらゆる火器を並べて猛射する。僅か千米位のところを逃げる敵だから、その効果は實に偉大ばたゝと倒れるもの數知れず。乗馬將校らしいのが馬から落されて、慌てゝ地隙に潜り込んだり、持ち物一切を投げ捨てゝ一目散に走り出すものあり、全く痛快だ。

斯くして午後一時頃には、旅團の示した進出線に達し、再び本道上を退却する敵軍の主力に射撃を続ける。この頃左の○聯隊は、懷柔西方高地に必死の抵抗をしてゐる敵を攻撃中だ。丁度我々の左後の方で、銃砲聲が響いてゐる。聯隊の機敏なる進出により逃げ場を失つて、所謂窮鼠的反抗をしてゐるらしい。午後四時頃、一たん退却した敵は、生意氣にも態勢を整へ、約八百名程我が右（宮崎大隊）方面に逆襲して來た。然も我に倣つて宮崎大隊の占領してゐる高

地の右側背に廻り出した。大隊長の計畫によりうんと近づけて全滅させてやらうと待つてゐたが、千米位前に來て、後は前進しない。かういふ敵には、榴霰彈の御土産を遣らうと、山砲は暴露した敵を打ちつけ出す。機關銃も連續點射で撃ちまくる、勿論敵の逆襲は不成功で、見つともない格好で又逃げ出してしまつた。

青森部隊正面の敵は、夕刻まで抵抗を續けたが、野砲の全火力の集中と飛行機の低空して行ふ爆撃により、遂に支へ切れず、午後六時頃から退却を初め、多數の死体を殘して退却した。爾後の追撃は命ぜられない否止められてゐるのだ。當夜は敵と一里を隔てゝ、快勝を語りつゝ夜を過した。

滿洲出動以來、こんな痛快な戦争はなかつた。これ程敵を包圍し、潰亂せしめた例も多くはあるまい。聯隊は輕傷三名（山中少尉對馬中尉工藤軍曹）重傷（中村次郎看護兵一名）計四名

の損害で、戦死者一名もなかつたのに反し、敵は戦場に三百餘の死体を残し、その上山砲三門同彈藥三百發、迫撃砲一門、その他多數の兵器彈藥を鹵獲し、多數の捕虜を得たのだ。此の大成功を見るに至つたのは、鈴木旅團長の適切なる攻撃計畫と、勇敢に戦争した第一線部隊の行動に因るもので、殊に聯隊が放膽なる迂回包圍をやつたからだらう。第一戦の勇敢さは驚くべきもので、餘り深く突入し、僅か一ヶ小隊で敵の二ヶ中隊に躍り込み、慌てゝ死を覺悟したなどといふ菅原特務曹長（〇〇隊）の述懐談もある。敵の砲兵陣地に突入し、敵が降参したから命は助つたものゝ、所持した拳銃で撃たれたら、今ごろ御陀佛だ等と大場少尉（第〇〇隊）の痛快な話もある。

五月二十六日懷柔の平地は静まり返つて銃聲一發も聞えぬ。時々敵の密偵が電話線を切るといつて、通信手が憤慨してゐる。昨二十五日には、敵の軍使が來た。密雲の師團司令部で、何事か協議したらしい。今後、如何に進展するか、戦闘が終つて民家に宿る。連日の疲れで心よ

い午睡をしてゐるのも和やかだ。「ビールが飲みたいなあ……」等と鷲尾副官が言ひ出した。「日本味噌でうまい味噌汁を吸ひたいもんだ。」頭の禿げた高橋曹長が之に和す。何にしても今望ましいのは夏服だ、冬服冬襦袢では北支の夏に東北健兒の元氣が出せない。北京と指呼の間に在り、今や我々は一切の不自由を征服して、北支を重壓してゐる。勝つて兜の緒を締めよ、しつかり締めた鐵兜に歩哨の面持ちも緊張してゐる。（終）昭和八年六月十三日

突込めの號令一下壯快極りなき夜襲

—古北口附近の戰鬪—

早川部隊 市川中尉手記

古北口へ、古北口へと自動車縦列は走る、大行李車輛は進む、その中に黄塵を浴びながら、炎天下に行軍を續けてゐるのは五月八日に於ける歩兵第〇〇〇聯隊だつた。

長城の線を確保せんとする日本軍の企圖に對し、支那軍は挑戰的態度を持し、興隆縣方面（承德南方長城北側の部落）には生意氣にも長城を越えて、一舉に承德を衝かんとして進入して來た。此の敵を撃退すべく出された部隊が我が聯隊の島村大隊で、最初は敵を驅逐して興隆縣

を占領したが、僅か二百餘の我が島村大隊に對し、敵は刻々兵力を増加し、遂に五千有餘を、兵力の優勢を誇つて我が島村大隊を包圍し、猛烈な攻撃を始めである。茲に於て〇〇は島村大隊を救援せしむると共に、敵に徹底的打撃を與ふる爲、第〇師團の全力を古北口方面に集め、五月十一日を期し、一大決戰の火蓋が切つて落された譯である。

x

島村大隊は、孤軍奮闘克く十數倍の敵に對し、四日間の防戰に力め、遂に増援隊の來着により敵を撃退したのであるが、此の間全滅を覺悟し、大隊長以下一團となつて奮闘し、模範的家屋防禦により立派に敵の突撃を拒止した。此の方面の記事は未だに連絡不充分の爲め、後日詳報することにする。

二月二十日以來、西や東或は南と四百餘里の道を踏破し、疲れ切つてゐた我が郷土兵も、第〇〇團を擧げての大激戰があると聞き、皆足を引きすりながらも己を激勵し、炎天下百餘度

の山道を蒙塵と戦ひつつ、五月四日夕古北口に着いた。南天門の險は一時承德に留つて居た我が聯隊の第〇〇隊が之を突破し、目下同地を守備してゐるのだが、南天門に間近き古北口の部落に宿營してゐると、闇の静寂を破つて激しい機關銃聲が響き、時々思ひ出した様に小銃の單發音が歩哨の耳を緊張させる。愈々明日から戦線に出ると思ふと、支那民家に眠る兵士の夢も自ら戦場に走つてゐる。

五月九日、諸隊は夫々任務に基き、攻撃準備の位置につき、十日には敵情地形を偵察し、特に夜襲の準備を整ふ。〇〇は〇〇右翼隊の右聯隊として敵陣地左翼方面の攻撃を擔任してゐるのだ。第一線各大隊は斥候を放ち、又配屬工兵（鴨澤大尉の指揮する〇〇〇）も専門の立場から鐵條網の状態を偵察し、又地雷の摘發に努めた。敵の威嚇的機關銃射撃等もあつたが、十日は先づ靜穩裡に日が暮れた。

日没するや、愈々夜襲に關する命令が下され、第〇〇隊（平柳少佐）は左第一線第〇〇隊（宮崎少佐）は右第一線として敵前五六百米の高地線に前進した。

敵の陣地は既に一月前より堅固に構築されたものであつて濠は深く掘り下げられ、機關銃の陣地は厚い掩蓋で掩はれ、小さな銃眼から我を睨んでゐる。また高地中腹には、機關銃の射線に平行して、鐵條網が構築され、射弾の及ばぬ凹地には、地雷を敷設する等、極めて巧妙な遣り方である。従來長城の敵に對しては、戦闘もしてゐたが、此の如き所謂近代的防禦施設の陣地に對しては、今度が最初なので、皆非常なる緊張裡に攻撃を準備し、聯隊長としては、師團砲兵の協力を豫期し得ぬ山地方面の攻撃部として、夜襲の斷行を決意されたのである。午後十時、第一線各大隊は、聯隊長の激勵の辭を受け、皆悲壯なる決意の下に必勝を自任し、所命の奪取目標に向ひ前進を始めた。月光淡く戰場を照し、標識の左腕白布が白く薄闇に浮んで、战友の位置を示してゐる。急峻な山の陰影に遮蔽して、各中隊は息も沈ませて敵に迫る。敵もさ

るもの、我が夜襲を察知し、午後十一時頃には全線に敵の猛射が始まり、山に響いて凄く戰場を震動さす精銳なる我が軍は、少々の射撃には少しも動せず、地物を利用して敵に近迫、愈々敵の位置明瞭となる頃、機關銃・輕機關銃の制壓射撃に續き敵陣に突入した。敵も頑強で盛んに手榴弾を投げる。銃聲は静まつて手榴弾の炸烈音が凄く響く、小隊長の肝高い「突つ込め」の號令續いて潮の押し寄せるが如き喊聲「第一部隊は敵の機關銃陣地占領ッ」敵は右へ廻つたぞ」銃聲に混つて第一部隊の聲が聞える。敵の狼狽する悲鳴強く火光を發する地雷の炸烈、戰場は今や奮戦白熱のクライマックス。

聯隊本部の電話の鈴がけたましく鳴り、大隊副官の歡喜に満ちた敵陣地占領の報告が来る第〇〇隊（鈴木大尉）第〇〇隊（石田大尉）第〇〇隊（今村大尉）第〇〇隊（吉田大尉）と相次いで敵陣地を占領し、夜十二時二十分までに完全に聯隊正面の敵第一線を驅逐以て我が第〇師團快勝の緒つくつたのである。昭和八年六月九日

炎天百度の下に冬服で汗だくの戦ひ

—古北口附近の戦闘—

早川部隊 市川中尉手記

此の頃、左翼隊及左聯隊方面は拂曉よりの攻撃を準備しありて極めてひっそりしたものである。午前四時、そろ／＼四面の明み始むる頃より、ポツ／＼銃聲が響く。夜の白々と明けて拂曉攻撃の砲撃開始されたる時は、逐次聯隊正面の敵は退却を始め、勢に乗じた我が第一線は、息をもつかせず之に追及、全く師團砲兵の協力なくして敵の左側背を押しつけた。此の勢に恐れをなした敵の全線は、漸く動搖を始め堅固に構築した陣地を捨て、逃げ始むるのを見受ける敵は縦深に陣地を占領し、然も縦深に部隊を配置してゐる。第一線を突破してもそれと殆ど同

等の兵力で第二線の防禦とする。師團正面の敵が三ヶ師なのだからそんなことも出来るのだらう。であるから約二千米も追撃した時、再び敵の抵抗を受くるに至つた。此の敵も掩蓋機關銃を有し極めて頑強である。重疊せる山岳地帯の追撃であるから、歩兵は前進しても山砲の追及が容易でない。

◆
そこでやむなく山砲の到着を待ち、それまでに敵情視察をなし、午後六時攻撃を開始した。

敵前四五百米に達した頃、四面漸く夜の帳に包まれ、敵の射撃も緩徐になる。再び夜襲によりこの敵を駆逐しようとしたが、昨夜からの戦闘で、彈藥の欠乏を訴へるに至り、小銃も一人五十發しか持つてゐない。

これでは陣地占領後、敵の逆襲に應じ、或は次の夜間行動に應じ得べくもない。依つて第一線は現在地に在つて極力敵情搜索につとめ、豫備隊を以て彈藥の補充を行つた。豫備隊たる第

〇〇隊（平澤大尉）の不眠不休の努力により、正午頃には概ねその補充を終り、次で機關銃歩兵砲の推進を待ち、午前三時半頃より朝の露を踏んで攻撃前進を始めたのである。

敵は猛烈な射撃を浴せかけたが一度浮き足の立つた敵である、我が勇敢なる突撃に忽ちにして崩れ出し、午前四時三十分には完全にその前線の陣地を占領した。然し敵は後方の陣地により、更に抵抗を続け、午前六時頃よりは逐次兵力を増加し、勇敢にも我右大隊（宮崎大隊）方面に逆襲して來た。

機關銃や迫撃砲と巧みに協力し、一進一止して勇敢に前進して來るのを見ては、さすがに御自慢の南方軍だなど第一線兵士も感心しないものはなかつた。それもその筈、後には督戰隊がゐて、退けば撃たれるのだから督戰隊が退かない限り、退却出来ない譯だ、謂ひかへれば前進するより外に途がないのだ。逆襲といつても突撃は決してしない、陣地前百米位まで來て、手榴彈を投げて又後方に退る。此の正面は餘程多數の敵が居たと見え、二百名位宛入り替り立ち

替りやつて来て夕方までに十數回之を反覆した。是は聯隊の猛烈なる進出により、敵主力の退路に迫つたので、主力を收容する爲にも是非さうしなければならなかつたのだ。

我が第一線は勇敢に前進しようとするが、何分にも死物狂ひになつて數倍の敵が我を拒止する、加ふるに昨夜彈藥の補充をした、とても極く少數なので、敵の逆襲毎に射撃して、遂には極度に彈藥の欠乏を來し、終り頃には小銃彈の代りに、石を投げて敵の近接を妨害する様な状態だつた。

昨日今日の暑さは激しく、炎天下は正に百餘度である。交通不便な熱河を補給路にしてゐるので、まだ冬服、冬シャツで山を上つたり下つたりしてゐる。全身汗をかくとたまらない程喉が渴く、兵隊を見ると敵の遺棄した水筒を殆んど大部分肩に下げ、自分の分と二つ持つてゐる突撃して敵陣地の一角をとると、敵が水桶を残して退却してゐる。敵に對する追撃射撃をそつちのけにして、敵火の集中を受けながら争つて水を飲む様な状態である。第一線から後方に行

くものは負傷者と、彈藥補充のものと、も一つは水を汲みにゆくものである。嚴寒もたまらないが、酷暑も兵隊の活動を妨害すること甚だし。

岩手健兒は強い―古北口の快勝

興

早川部隊 市川中尉手記

此くして正午になるも同一場所に止るの已むを得ざる状況であつた、加ふるに聯隊は眞先に敵陣深く突入した爲、正面の敵のみならず側方から射撃を受ける。殊に右の方は非常に高いので〇〇は一兵も之に向けず、中央突破を期したので、右の方は側方といふよりも、背後より射撃を受ける状況で、直接第一線部隊が困つたのみならず、彈藥補充傷者の後送に任ずるものまでが、非常な妨害を受け、中にはその爲戦死するものも生じた。

□

十二日夜は、此の敵に對する拂曉攻撃準備と、彈藥補充に夜を過し、十三日を迎へてしまつた。朝まだほの暗い午前五時、兩大隊は拂曉攻撃を開始し、午前五時半には相前後して敵の第

一線陣地を突破した。此の頃から〇〇前面の時は全く總崩れの形、然も此の位置より後方には餘り堅固な敵陣地がない。敵はもう身を護る鎧をとられた様なものだ。全然弱點を暴露して、只管退却を始め、之に對する我が歩砲火の集中する兵の迅速なる進撃に、全く算を亂して倒るゝもの數知れず、我が進む處に敵の血痕なきはなく、凹地に屍体のなきはなし。重要書類も捨て電話線も捨て、如何に周章狼狽したか、窺はれる。事實敵は徹底的打撃を與へられた譯だ。

第一線は勢ひに乘じ敵を追及し、左翼隊の一部は夕刻石コウ、鎮に入り、聯隊もその西北方の線に進出して豫定の進出線に達した。これから先はさう簡単に進撃も出来ぬ。外交上の問題も起つて來るので、十四日には兵馬營といふ部落に集結し部隊を整理し、且つ前方の敵情地形を偵察することになり、古北口附近大激戦も東北健兒の奮戦により、見事第〇〇團の快勝となり大いに皇軍の強味を示したのだ。今後更に前進を續ける様にもならう、一同準備を整へてその命令を待つてゐる。

興

今回の戦闘は精銳を誇る南方軍と戦ひ、然も兵力我に數倍し、裝備も優秀、陣地も堅固であつたので、この大勝を博した裏面に幾多尊き犠牲者を出すに至つた。〇〇が一番多かつたのも砲兵の協力なき方面に戦闘したのと、岩手健兒の眞の勇敢さを發揮したからだ。戦死者は既に火葬も終り、战友の温き心を受けて安らかに眠つてゐる。負傷者も全部衛生班に護送され、軍醫の手厚い看護に早く癒つて再び戰場に立つ日を待つてゐる。

今回の戦闘に大勝を博した一因として、誰しも〇〇が敵の左翼を席捲する如く、常に他隊の先に立つて勇敢な攻撃をしたといふ事は認めないものはなからう、それだけ岩手健兒は戦に強いといふ事を証明するものだらう。界嶺口に於て中村〇團長を驚かした石家溝の夜襲を考へて見ても、岩手健兒の強味は萬人に首肯されてゐる。之だけは在郷父兄に喜んでいたゞきたい處だ北支の風雲方に急を告げてゐる。昨今所謂勝つて兜の緒を締めて、益々内地國民の御期待に副はん事を期してゐる。

鴨澤中隊の奮戦三ツ望樓の攻撃

鴨澤討伐に参加した 盛岡工兵部隊一兵士

我が鴨澤部隊は、承德一番乗以來格別のことなく經過致しをり候處、去る四月十二日、古北口占據一ヶ月當夜九時頃より、敵は稍優勢なる砲火を盛んに我が軍の宿營地附近に發射、十三日午前三時、敵は斷然強夜襲をなしたるも、とき既に夜明近くのことなれば、多大の損害を受け撃退その後格別のこともなく居りしも、毎夜の様に射撃止まず、全く安民防害の上なし。四月二十日早朝より降りし雨は、何時になく心淋しさを感じさせ、何事か起らんとせるものゝ如し。風は雲を呼び、花は見るゝ砂塵と化し、折角満開せし梅。桃。梨の花は兵士をなくさめをりしも、僅か半日の風雨は散亂、兵士の楽しみ何一ツなし。正午雨は全晴れ、所々青

空を見せをれり。鴨澤中隊長は、何物か腦裏にあるものゝ如く、人目を離れて盛んに地圖を見てゐる様なり。午後一時何時になく緊張したる態度にて、左の如き命令を發す。

愈々明日は攻撃準備せよ、との只一言發せるのみ。二十日午後九時、歩兵〇〇〇隊工兵〇〇隊は、出發攻撃、目標三ツ望樓。これこの三ツ望樓は、萬里の長城中、最も歩行困難、それに急峻この上なし。丁度岩の頂上に向つて攻撃するやうな有様に候。この途中には、水は只自分の水筒頼るのみ。二十一日午前三時、果然敵は發見せるものか、強烈なる射撃、然れ共我が兵士は射撃する場所はなし、歩行最も困難なる坂路に伏するのみ。午前四時頃、愈々戦況は進展し、此處に於て軍は集結終り、午前五時我が軍の野砲。山砲。高射砲は一齊に射撃開始。第一線部隊は、暫らく沈靜、午前六時愈々歩兵は前進、工兵は鐵條網の破壊、地雷の搜索、段々攻撃は成功。午前十一時、果然敵前百米機關銃。小銃。手榴彈は休む間もなく撃續して、午前十一時三十分、此處で日露戰爭以來の肉弾戰と化し、一方には一騎打始まる。支那兵とて馬鹿には

ならん、逃げ場を失へば斷然逆襲、然も空拳其の儘やつて來ますぞ、油斷は出來ません。其の内に後方連絡切れ、彈藥缺乏す。之に敵は逆襲。止むを得ず石を投げ付けて打倒す、やつぱり支那兵は馬鹿だ、石に打たれて退却開始す。此れ豫定の退却か、死傷者を全部手足を引張つて谷間を行く動作は、丁度蟻が虫を引張ると同様、見る人喉の痛くなるほど笑ふ。

此れより、敵は毎夜逆襲せるも何時も撃退せられ、二十六日迄續く。二十七日午後九時、工兵主力は斷然第一線部隊に配屬。敵は最も高い稜線に陣地を築き、低き所は鐵條網を張り一步と雖も前進困難なり。其れに山蔭は至る所地雷ありて、他兵の進入出來ず。若し一步誤つて地雷を踏めば百二十貫の馬、五尺の人体は粉碎され、影も形も肉一片すら見る能はざる有様になつて了ふ。此れが爲め、他兵科の者は工兵なくて戦は出來ず、工兵は神様の様に信じられ居ります。此れと同時に工兵は、此の時とばかり前正面一里に亘り、不眠不休地雷搜索に従事致し

て居りますから御安心されたい。其れに工兵は、僅か二ヶ小隊、何んと薬にも足りません愈々、前面の敵は、約三ヶ師團。益々陣地を固くし、毎日砲弾は頭上に落ち、危険此の上もなし晝は何事も出来ず、夜間のみ、彈丸の身に當らざるを不思議に思つて居ります、何故此れ日本國は神の國なればこそなれ、今日は五月六日、九日頃は又も總攻撃は開始されん、死か生か、最後の争ひか、此れ日本男子の譽ならん、只々護國心あるのみだ。鴨澤中隊は、今や士氣最高に達し、恐るゝものなし。中隊長泰然として曰く工兵なくて戦は出来ぬ。昭和八年五月廿一日

羅文谷血戦録 (その一)

紙居中隊長手記

謹啓 錦州にて、一度御目にかゝりし以來、御無沙汰仕候。以下飛行便にて取急ぎ御一報申上候。

二月二十日。聯隊は、熱河討伐一番乗りとして進軍し、嚇々たる偉勳を擧げ、中隊も口北營子の戦闘に於て、優勢なる敵を撃退し、先づ得意満面に候ひしも、その後師團作戰計畫に依り毎日行軍々々にて朝陽・陵源・平泉を經三月九日承德に進入仕候。この間、酷暑と戦ひ臭氣紛々たる支那家屋に宿營し、無慮百數十里を突破致し候處、何等戦闘することなく、徒らに川原挺身隊の偉勳を羨望しつゝ、脾肉の歎を喫し申候。

三月十三日。聯隊は、愈々新任務を與へられ、萬里長城の線上要點たる羅文谷に向ひ進軍勇

躍承德を出發仕候。羅文谷に至る行程約三十里、道路は人馬漸く通ずる程度にて、自動車は勿論馬車も通せず苦心慘澹四日を費し、十六日漸く羅文谷附近に到着仕候。明くれば三月十七日愈々敵陣地を攻撃することとなり、中隊は聯隊の左第一線として長城前方約千米の地點に展開致し候。敵は天嶮に據り、其兵力約三千と號し、死力をつくして頑強に抵抗するの意氣盛んなり。

中隊は聯隊主力方面と離隔しあり、正午頃より右方に漸次銃聲旺なるを聞き、午後一時直ちに前方約三萬米の敵陣地を奪取すべく攻撃前進を開始す。前面敵の兵力は、約百五十加ふるに天嶮にして斷崖絶壁、阿部・高橋兩小隊を以て正面と側面とより挾撃前進せしむ。兩小隊の猛烈果敢なる行動前進に依り、交戦約一時間三十分にして、先づ目的の陣地を占領す。この間不思議にも一名の死傷者なかりしは、天佑と存じ候。然して敵に更に後方の陣地に據り未だ退却せず、中隊は該高地を扼守し、聯隊主力方面の攻撃進捗を持ち敵と僅々百米を隔て、相對峙し

其の夜を徹す。此の間、少しにても頭を上ぐるときは、敵の集中火を蒙るに至る。恰も沙河の對陣を想到す。明くれば十八日、中隊は愈々拂曉を期し、前方高地を占領するに決す。敵は夜間工事を実施し、其の兵力を増加し、中隊正面約三百名、加ふるに地形天嶮、馬の背を行くが如し。(現在中隊の兵力中隊長以下〇〇〇名)午前六時攻撃開始す。先づ擲彈筒を配列し、手榴彈を敵陣地に投入し、次いで重機關銃・輕機關銃全部を以て掩護射撃を爲さしめ第一第二小隊の順序にて急據敵前約三十米の地點に前進せり。然るに敵は依然最も頑強に抵抗し、毫も退却の色なし。小銃自動小銃を亂射し、且つ無數の手榴彈を我が陣地に投入す。敵は散兵壕に據り、其兵力我に四五倍す。且つ青龍刀を高く掲げ、其の意氣軒昂なり。我れは逐次死傷者續出し、一時苦戦の状態に至る。茲に於てか中隊全員決死の覺悟を以て、中隊長小隊長を先頭として、全員猛烈な喊聲を以て突撃す。然れども猶敵は頑強に抵抗し、突撃前進間旺んに手榴彈を投擲し、中隊長阿部少尉も各二彈を受く。然れども不思議にも破裂せず、何等傷を受くること

なく敵陣に突入す。敵は遂に抵抗を断念し、武器を捨て退却す。退却するを追ひ後より刺し突き、殆ど全員を殲したり。次いで其右前方第二第三陣地に突撃し、半数以上の損害を與へ之を撃退、遂に長城前方最大の要點たる高地を占領せり。此の間聯隊主力方面は猛烈に前進しつゝあり。此の戦争に於て、敵の遺棄死体百二十、小銃・自動小銃・青龍刀多數の武器を鹵獲し、嚇々たる戦勝を得たり。我に戦死一（上等兵吉田二）負傷者十五名、生存者はホット一息し、不思議に命永らへしを語り、且つ戦勝を祝し、敵死体の壘々たるを眺め、痛快を絶叫せしも、顧みて我が戦死傷を偲び、涙を以て其手當後送の處置をなし、次いで更に攻撃の準備を爲す。嗚呼これが戦場か、よも日露戦争にも劣るまじ、武人として幸ひなるかな此の貴重なる体験は、後略。

以上取急ぎ有りのまゝを申上げ、兵士各位の父兄は勿論、一般銃後各位に宜敷兵馬こうこつの間亂筆不文多謝。（三月二十五日）

羅文谷血戦録

（その二）

島村大隊長手記

前署去る二月〇〇日夜〇〇を出發前衛を承り、大隊獨力にて控北營子の敵（迫撃砲を有する數百名）を撃攘、戦死兵一、負傷特務曹長一、兵六を生じましたが、越えて二十二日、北票入城枝隊主力と岐れて、北票警備に任じ、二十二日後任部隊と交代前進を開始、それより歩きづめて承德に達し、三月十日同地を發し、羅文谷に向ひましたが、この進路は殆ど道路と言ふ体裁を備へて居らず、眞に峻峻な山坂許りで、ナポレオンのアルプス越えにも劣らぬ難行軍でした。これがため辛うじて人馬を通すのみ、後方の補給が間に合はず、極く稀に支那米にありつき、然も大切な弾丸がつづかず悲惨なものでした。しかも二月〇〇日〇〇を出發以來既に百數十里の連続行軍休むまもなく、戦闘警備と言つた状態で、將兵の疲労は殆ど言語に絶して居り

吾

ました。いかに東北の兵が強いと言つても、随分思ひ切つた攻撃で、今思ひ出してもよくやれたものだと部下に感謝して居ります。二晝夜の連続攻撃にて、遂に長城線を占領しましたが、この邊の地形は切り立つた絶壁の上に長城が築かれてゐるので、これが攻撃に當つては、斷崖を攀ち登つて、實に苦心慘苦を嘗めました。然も敵は殆ど我に十倍の優勢で、大刀會匪も混入してゐましたが、部下の第〇第〇の兩隊等は僅々數十米の近距離で岩角にかくれ互ひに手榴彈を投げ交はして戦ひましたが仲々頑強に抵抗し、愈々銃劍を翳して突撃して行つても青龍刀を振りかぶつて踏み止まり、芝居がりの武者振りですが、從來の如く逃げ足も早くなく、五米位近いて漸く逃げると言つた調子、將兵は日本刀の切れ味を試すは此の時と、阿修羅の如く奮ひ立ち、第〇〇隊の某兵の如きは、日頃鍛へた銃劍術の腕前を現はし、やつと言ふ間に、二人を團子さしに突いたものさへありました。けれど、かくの如き近接戦のため、私の部隊だけでも戦死三名、重軽傷加藤大尉以下三十五名といふ多数を出し、渡滿以來の大激戦を演じました

殊に加藤大尉の隊の如き、同大尉以下各〇隊長悉く傷き、私の傍にゐる者も、傳令に至るまで擲彈筒を以て戦ふといつた状態でした。多くの勇士を失ひ傷けたことは眞に遺憾に存じて居ります。戦後大行李から補給の握り飯を暗夜岩石の上に坐して食した時の美味は何ともいはれず舌鼓を打つてたべましたが、これとて小豆と粟の混合飯でした。敵の屍体は數知れず慘澹たるもので、分捕品も數多ありますが、何分荷厄介ですから、ほんの一部より保管してをりません。小銃自動拳銃青龍刀各百點位宛を保管してをります。敵も餘程へこたれたと見え夜になると夜襲をおそれ、迫撃砲機關銃等やたらめつぼうおび切つて打ち續けてゐます、よく軍費が續まきすね。内地からの通信も、新聞も〇〇出發以來一ヶ月全く手に入れません。風呂に入りたくも、垢を落とすと忽ち感冒に犯される虞れがありますので、全く着のみ着のまゝでやつてゐます、又後便にて。

(十一十四日)

小泉部隊盛岡工兵の偉勳

—山海關爆破の實狀—

姿

謹而奉賀新春候。一日は司令部ですつかり新年氣分を味ひ、二日は北大營各隊の廻禮にて、可成酩酊仕り候も、此日午後三時山海關事件にて急遽出動の命令あり、準備を完了して、午後十時頃北大營ホームより、第二列車にて野砲と共に出發、錦縣驛には參謀長殿と多數の見送りあり、參謀長殿參謀と共に固い握手せられて成功を祈られ、感激に満ちて出發仕候。列車内はあすをも知らぬ部下の中隊兵は、他愛もなく眠り居り候（中略）總指揮鈴木團長閣下は之に圓下各聯隊の集成にて、師團としては最大の兵力を出したるものと存ぜられ候。午後六時黎明の山海關驛に到着直ちに諸準備に着手仕り候。北方山海關城は、巨大な姿を曉の霧の上に浮き出し、嵐の前の静けさを保ち居り候。驛附近家屋の廣場を發見し、茲にて命令を下達、訓示を與

へ、準備に着手仕り候。城壁の偵察は、最早困難なる情況につき、一情報を總合し、豫想を以て藥量を、城門に五十キロ城壁に七十キロとし、別送戰鬪要報の如く、宮田小隊を右歩兵第〇〇隊方面山田小隊を、左南門山海關守備大隊に部署し、午前九時半には準備完了につき、夫々分進せしめ、機を見て爆破すべきを命し申候。爾後の詳細は、戰鬪詳報によるべきも、中隊としては渡滿後の最大激戰にて損害も多大に、然かも工兵的戰鬪を實施したるものにつき、速報申上候につき、要點は兵監部にも御報告申上候。殊に山田小隊の城門爆破は、壯烈無比にして感激の至りに堪へず、十分工兵精神を發揮せるものにして、多數の犠牲者に對しては、眞に同情に堪へざる所に候。

◆
次には山田小隊の南門爆破につき申上候。山田小隊も、宮田小隊と同一場所にて、裝藥の困包を行ひ、三十キロ、及二十キロの、集團裝藥として午前九時三十分完了。南門攻撃隊たる浴

合山海關守備隊と共に前進し、當初戦車の後方を續行したるも、城門前二百米附近は、砲弾により民家は火を發して火焰濛々、戦車は揮發油の發火を恐れて前進せず、茲に於て山田中尉は意を決し、豫め部署せる所により第一班壞班、道尻軍曹以下を率ひ猛火を冒し、敵の銃彈雨注する中を南門に到着仕り候。装薬に引火を防ぐ爲、雷管孔を身体に密接して、萬一の場合は爆薬と共に粉碎せらるゝの決意を以て前進したるものに有之候。

門は堅く閉鎖せられ、後に調査する所によれば、中經二十センチの丸太にて、左右の煉瓦壁に固く鎖錠し、尙土囊を高さ一米五十内外に推積し、下部より射撃し得る如く設備されたるものにて、近接と同時にこの下部の銃眼及左右の城壁より猛射を受け、尙手榴彈の投下雨注の状況ありしも、幸ひ附近一帯の火災は煙幕を構成し、作業手を秘匿したるものゝ如くにて、損害を受くることなく、附近の諸材料及び、豫め携行せる土囊により、臺をつくりその上に装薬を

装置して、三本の道火索に點火（點火手澤口及仙幡上等兵）後退せるや、轟然たる爆音は天地をゆるがせ、門内の敵兵を四散し、厚さ三十糎餘の門扉は粉碎せられ候。小隊長は直に揚湯班長永澤上等兵（工兵のみ）を以ての休勢に於て一彈を腹部に受け、其場に倒るゝに至れり。大久保一等兵は、分隊長を救はんとして前進、途中足を捻挫し、伊藤忠雄一等兵は道路左側に轉位せんとするせつな、鐵帽に一彈を受けて路上に倒れ悲惨の光景は到る處に現出仕り候。齋藤上等兵は、雨下する彈雨の中を、遠藤軍曹を收容し、ささやかなる家屋の蔭にて瀧口看護兵と共に應急手當をほどこし申候。

傷は腹部の銃創にして、可成の重態なりしも、剛毅なる軍曹は一言の苦痛ももらさず、良くなつて只々戦鬪を念じるのみにて、遂に意識不明に陥り、戦鬪後衛生班に收容途中、遂に瞑目仕り候。私としては實に惜しみでも餘りある有爲の下士官を失ひ、悲痛の限りに候。任務出發

前敬禮を受けたる時の軍曹決死の面貌今尙眼中に有之、追憶の念禁する能はざるもの有之候只目下情況上、尙死者の禮拜の餘裕もなく、眞に戦場の悲惨事を体験仕り候。

然れ共、この軍曹の勇敢なる行動により、克く友軍機關銃の危急を救ひ、聯隊本部を援護したる功績は、永久に記念さるべく、其尊き血潮は永遠に盛岡工兵の譽れと稱へらるゝ事と存じ申候。此間小隊の他兵は克く射撃を以て敵を倒し、手榴弾戦を敵と開始して、遂に右方に進出せる友軍をして、西門を確保するを得しめたるものに有之候。戦後現場を見るに、敵の死体五十を下らず、累々として當時の激戦を物語り居り候。

官田小隊は三十疋及び四十疋の二箇の集團装葉を携行、友軍の猛烈なる破壊射撃敵の迫撃砲弾し、炸裂する内を前進して、歩兵第五聯隊と共に偵察せるに、野砲弾の命中により、突撃路

一條を發見、之を聯隊長に報告すると共に、更に一條の突撃路開設を準備したるも、當時未だ城壁下より抗道を以て連絡せる重機陣地猛威をふるひ近接すべくも非ず、まづ該機關銃の撲滅をはかり居りしを、丁度友軍歩兵砲の爲撲滅せられ、歩兵は城壁上に突撃を開始したるを以て爆破を中止し、直ちに續行し、市街地における敗兵の掃盪に着手、午後一時頃には、既に西門附近に進出仕り候。當時本道上は重機一小隊次ぎ、工兵次に五聯隊本部と共に兵一小隊續行し重機は西門上の敵を射撃して、西門内に進入せる時、突如左城壁方面より約二百の敵は退却す當時遠藤軍曹は道路右側の先頭を行進し、左側の小隊長と能く連繫し、戦闘に任じたるものにて遂に敵輕機の目標となり、彈身邊に雨注したるも、尙毅然として部下を指揮し、且自からも射撃に任じたるものにて、其の剛膽は軍曹の平素の行爲と照し合せ、眞に驚嘆に値するものにて有之候。分隊の部下は、分隊長の危急を知り、後退地物によるべきをすゝめ、小隊長亦左側に轉位を命じたるも、攻撃精神旺盛なる軍曹は更に躍進、次の地物に依り、敵に猛射を加へん

とせる一せつな前進し、該地の殘骸を整理し、更に第二の内門を偵察するに、正面及び右側面よりの側防火猛烈にして近接するを得ず、第二破壊班千葉軍曹以下を招致したるに、該班は城門三十米内外の近距離にて、城門上の側防火の猛射を受け、先頭爆薬携行兵池田定雄は遂に敵の手榴弾の爲、右肩及腹に銃創を受けて倒れ、次いで木村金之丞一等兵はこの装薬を拾はんとして、左眼盲貴銃創を受けて倒れ、更に携行せる第二組長住吉上等兵はこの装薬を持ち二三步躍進中右腕に複雑なる貫通銃創を受けて倒れ漸くにして點火手立石上等兵は装薬を破壊せられたる第一門まで携行せり。爲に該装薬は、これ等忠勇なる戰士の貴き血潮を以て、黄色の薬包も唐紅を呈するの情況に有之候ひき。池田一等兵は、衛生班に收容後當夜遂に死亡し英靈水に山海關の地に留り、國軍工兵の花と散りたるは前途ある青年のこと涙禁する能はざるもの有之候。今この手紙をゆめくらうそくの下に認むる時、當時の情景想ひ出され、或は殘念と叫び、或は中隊長やられましたと悲痛の聲しほり、或は銃を他人に渡さんとがんばり、又は

銃を渡すにこの銃に弾が込まつてゐるぞ、氣を附けると云ふなど、又は自らの負傷をこらへて戦友を介抱したる後、收容せられたるなど、悲壯の内にも東北健兒の眞價を遺憾なく發揮し、報國の赤誠に燃ゆるの眞情には、只々感泣するのみに有之候。

獨り戦病者のみならず、部下將兵は、眞に死生を越えて活動し、その行動は、神の如く戦い了り小隊毎にその勞をねぎらふ時、涙自づと双頬を濕すを禁じ得ざるもの有之候ひき。

扱てかゝる内、第一城門にては右側土壁内の敵と手榴弾戦を行ひ、決死的偵察の結果第二城門は門扉なく土囊を以て二段に閉塞し、銃眼より輕機關銃火の猛射を受くるに至り、尙勇敢なる敵は逆襲に轉じ來れるも、よく敵の土囊に近迫する能はず、幸この時戦車漸く到着し、永澤上等兵以下の手榴弾班は、戦車を掩体として前進し、適切なる手榴弾の投擲により、第二の掩体に近迫し、之に接しつゝ手榴弾を以て背後の敵を撃退し、土囊を破壊して戦車及び友軍歩兵

を誘導し、其先道として遂に南門を占領、抵抗する敵を撲滅してその占領を確實ならしめたるものに有之候。

時正に正午、颯々たる萬里の長城は（萬年筆のインキも切れ申候まゝ、鉛筆にて御許し下され度候。）我等の戦勝を祝福するが如くに候。附近は敵の戦闘司令所のありし所、散亂せる死體、重機、藥夾、手榴彈等にて足の踏み場もなく附近民家は砲彈のため、炎々として火災を起し、市街内は市街戦の銃聲絶え間もなく、物凄き光景を呈し居り候。

尙後方にて次の作業を準備中なりし平忠治・菊地精一 一等兵は、敵の重迫撃砲彈の炸裂のため重輕傷を負ひたるものにて、平忠治の如き自己の受傷を忘れ、菊地精一に假纏帯を施し、その後始めて負傷を申出たるものにて、その戦友を思ふ至情にはこれ又泣かされ申候。

沼澤政太郎 一等兵の如きは、手榴彈班として活躍中一彈を右腕に受けたるも屈することなく、終日戦闘に従事し、夜遅く宿營に就くに際して、始めて申出たる如き、何れも皆旺盛なる志氣を以て鬼神を泣かしむるの勇士のみに有之候。本地方には各國軍あり、戦闘開始せらるゝや、濟南その他の戦例をあげ、この堅固なる陣地に對し、相當日數を要すべしと言ひたるに、午前十時攻撃開始以來僅かに三時間にして、全城を攻略したるには驚嘆致し居るとのことに候

敵は學良の精銳未だ負けたることなしといふ第九路何柱國の軍隊にてその裝備及戦闘法共に侮るべからざるものあり、敵とは云へ、實に良く勇戦奮闘したるものに有之候。外交關係は全く不明なりしも、暫く當地にあるものゝ如く、附近二里の近距離には支那軍充満致し居り候。

今午前二時弦月は淡く新戦場を照らし、歩哨の銃剣、巡察の足音のみ深夜の寂莫を破り居り候。兎に角本戦闘は師團としても、中隊としても最大激戦にして、殊に話に聞く困難なる城門の爆破に成功したるものにて、この點御安心下され度候。然れども多数の戦傷死者を出したるは、全く遺憾にて、これ等忠勇なる部下の銃後を思ふ時、止め度もなく涙の出づるを如何とも致し難く候。

宜しく銃後の御世話呉々も願上奉ると共に、この情況を公表し、奮戦の勇士をなぐさめられ度懇願仕候。陣中多忙、雑文亂筆の件宜しく御海容の程願上候。(一月四日夜山海關城内にて小泉大尉より、上原大佐宛たるもの。)

萬里の長城上に笑つて死を覺悟

干泥中尉手記

内地の方々よ感謝せよ、張學良と云ふ男に；而して、天神地祇に祈られよ、張學良が抗日侮日を斷念せず、次々と積極的に斷行しつゝ、西藏の西端に至らざる間は死せざる様にと皇紀二千五百九十三年、即ち昭和八年一月三日は何んと云ふ芽出度日ぞ、實に恵まれたる紀念日ぞ、茲にも張學良の抗日侮日の心の姿ぞ現れて山海關の戦闘こそ起さしてくれた。近年頗る有難き男は張學良なのだ、即ち彼の御蔭で私等迄がこの滿洲を見物する事を得た。新しき兄弟姉妹とも事實上毎日親しむことをも得た。更に亦我々の専門上の仕事の上に、最も必要な腕試しの機會迄與へてくれ、且世界無二の名所萬里長城に於て試さして迄くれた全く有難き男なのだ憎む勿れ。

◆
 今度の試みで、今後に於ける吾人の専門上の仕事は、正札を附しても、先輩の功に恥を掛ける進み行ける確信を得さしてもらつたのだ。感謝に言葉を惜まない。今度は試みであつたから自己も血税を拂ひ部下生命税も血税も拂はせたのだ。今後は今度の如き大事な廣大な税は拂はず歩兵五百、砲十門内外その他若干の協力兵種あらば、中華地帯に現存する城ならば、毎日でも一日に一城宛は陥落さしてやる。是は單に私一人の得た確信ではない、一兵に至る迄、山海關の戦闘に参加した者東北男子の誰もが等しく得た確信なのだ。城中に居る敵兵力等は幾千だらうと、幾萬だらうと、亦城の如何に堅固であれ、大きくあれ、設備が如何に整うてあれ、左様のことは問題とするに足らない、敵兵多なら多く殺せば足るので。敵兵多ければ多い程望みと愉快味と働き甲斐があるのみだ。

◆ 皇の身如土に笑つて張が憂

以上の通りで、實に今度の山海關の戦闘は、吾人東北の者、殊に私の如き氣の廻らざる者に對しては、天津城や北京城に對する公算豫測の策定並に身の振方、指揮上に到るまで、總ての方面において、無二の教育をしてもらつた次第。之といふのも支那に張學良無かりせば學ぶ事の見込すら無かつたことなのだ。幼年の時は、孔孟の遺書に依て、私は今日の元氣の一部を養つてもらつた。今亦天道保護術を處もあらう、世界無二の名所、萬里の長城上において、名物男張學良より學び得たとは實に痛快。

◆
 逝ける部下も、傷負へる部下も、友も同感ならん。實に男子の痛快事なり。定めし笑うて逝き、笑うて次の準備のため、傷の保護に努むる事なり。

◆
 今や、私も衛生班の一室に身を横にし、戰訓を整理すれば、得る處以上の通り、希ふ處も亦

以上の通りなり。忘るゝを得んや、皇紀二千五百九十三年一月三日を：午後一時、我聯隊の軍旗は燦然として、山海關城中の最堅天下第一關と稱する高樓城内に神在しありし御姿を拜す時逝ける者も、残りし者も、共に萬歳連呼して止まざる快事なり。

尙追記して喜ばん、昭和七年一月三日は、錦州城に入城せりといふ、本昭和八年一月三日には、山海關城に入城せり。來る明九年一月三日には何處に入城すれば宜しきや、皆は擧げて之を案じ擧げて希望を述べよ。

自己の慾に満足を興へんために良民を苦しむるに、世界まで使役せんとするが如き張學良は國籍の如何を問はず、之れに悟りを促すためには、あらゆる手段と努力をなすに憚る要無きものなりと信じ、得たる確信を以て一段の努力をせんとす、何卒皆様御安心あらん事を乞ふ。

陣中往來

勅 中 封 來

戰陣の初日の出を拜しつ

謹賀新年

戰陣の初日の出を拜し、轉た感慨無量なるもの有之候。去りし年月を顧みて、天壤無窮の御皇室の偉大さに感泣すると共に、各位の熱誠こもれる御後援御援助の如何に我等を勵まし、水火に入るも辭せざる慨を興へしか、感謝に堪へず候。更に此一年倍一倍の努力を以て御期待に添奉らんと期し居る次第に御座候。

今や熱河の風雲端貌を許さざるもの有之加ふるに聯盟米露の暴威益々振ひ引いて國內の不況となり、内外共に多事邦家の爲愈々御健勝に待つもの多き次第に御座候へば、折角御身御大切に遊さるゝ様蔭ながら祈り奉候

敬具

昭和八年一月元旦

歩兵第五聯隊大佐 谷 儀 一 外三十三名

岩手縣知事閣下

陣中第二の春を迎へて

愈々昭和八年度陣中第二春を迎ふるに當りまして、閣下始め縣民各位の深甚なる御同情に依り、今回我等派遣將兵一同に對し、酒肴料を賜り有難く頂戴致しました。就きましては粉骨碎身以て御奉公申上げ、閣下及び縣民皆々様の御期待に副ふべく假初にも反する様な行動は斷じて致しません。既に御承知の通り、熱河省方面の風雲たるや事急なる情報しきりに参ります。目下は、師團の衛兵中隊として、師團の護衛の任に精出して居ります。戰友諸君も一同元氣旺盛で、〇〇省攻撃を豫想し一朝事ある場合に備ふる覺悟意氣込みで居ります。

末年ながら郷里に於かれましても、酷寒退かざる折柄遙かに陣中にて、貴官始め各位の御健康を祈り上げます。

甚だ簡單ながら御禮申上度、縣民各位にも宜敷く御願ひ申上ます。 敬具

昭和八年一月元旦

滿洲派遣軍第八師團步兵第三十一聯隊第九中隊 小松平 富藏

岩手縣知事閣下

山海關戰鬪に對し感謝の電報

支那東北の第一門たる山海關に於ける激戰に當り、敵を織滅し、皇軍の威武を發揚せられたる貴隊の榮譽と郷國の誇何ものか之に過ぎん。謹みて郷土出身の將兵各位の武運長久を祈ると共に、感謝感激の謝意を捧げ、且つ名譽の戰死者諸氏の英靈を弔し、戰傷者諸氏の速かに全癒せられんことを祈る。

八年一月六日

滿洲派遣軍步兵第三十一聯隊長宛

岩手縣知事

一

此度の山海關に於ける南門爆破に御殊勳を顯はされ、感謝感激に堪へず、謹みて將兵各位の武運長久を祈ると共に、名譽ある戰死者諸氏の英靈を弔し、戰傷者諸氏の速かに全癒せられん

ことを祈る。

八年一月六日

滿洲派遣軍工兵第八大隊第一中隊長宛

同上返事

町寧なる祝電並に弔電を深謝す。貴縣下各位の深厚なる銃後の御後援に對し、誓つて國威發揚せん。

一月十日

步兵第三十一聯隊長

岩手縣知事宛

感謝す。負傷者は元氣旺盛なり、中隊は依然現任務に邁進中なり。

一月十日

小泉工兵中隊長

石黒知事宛

帝國の生命線を護りつつ

謹啓 明けましてお目出度う御座います。帝國の生命線を護りつつ、昭和八年の新春を滿蒙の曠野に迎へ、遙かに聖代の瑞雲を仰ぎつつ、貴廳皆々様の御慶福を御祈り申し上げます。

さて新春を滿蒙の地に迎へ居る私共の銃後を充分に御援護下されまして、更に後顧の憂なき様完全に手段御講じ下されますこと誠に有難く厚く御禮申上ます。小生はお蔭様にて無事に、東洋平和の維持に、又は滿洲國の治安維持に、將又居住民並に鐵道の保護警備等に晝夜兼行粉骨碎身、奮闘致して居りますから、乍憚御休心下さい。此の新國家の土匪賊は段々其の姿を消しつつありまして、滿洲國並に東洋平和は刻々安全に確保せられつつあります。之れ偏へに銃後の縣民御一同様の熱情溢るゝ力強き御後援の賜と深く感涙に打たれざるを得ません。茲に厚く御禮申上ます。殊に先日は拙宅に、又は遠く此の滿洲の地にまで、皆々様の御同情の

完

尊き慰問金御送り下さいまして、誠に有難く何と申上げて御禮申していゝやら御禮の申様もありません。此の上は、只々一意専心國防の第一線に立つて、皇國の爲に力を盡し、以て此の高恩の萬分の一なりとも報ゆる堅き覺悟あるのみで御座います。

先づは遠き此の滿洲の地より御禮申上げます、何卒皆々様益々御健康に多幸ならんことを御祈り申上げます。

昭和八年一月四日

派遣軍歩兵第三十一聯隊第三大隊第十中隊 名 原 淺 治

岩手縣知事石黒閣下

外御一同様

東北健兒の意氣を發揚せむ

拜 啓 時下嚴寒の候閣下並に各位益々御健勝の段奉慶賀候。不肖お蔭様を以て無事頑健にて帝國生命線上に立ち、警護の任につき居り候間乍他事御休心願上候。

さて先日は不肖家族經濟不如意なる生活致し居り候處有難くも慰問金御惠投被下候由、以前も度々何くれとなく銃後の御心配御助力下され候由承はり茲に厚く御禮申上候。
不肖は既に身を捧げたる身体なる故、一意専心、上官の命を守り奮闘致し居り候故、心配なく益々君國の爲盡力し、以て東北健兒の意氣を益々發揚せんと、及ばすなから深く決心、努力致し居り候。

先は簡單ながら亂筆を以て右御禮申上度如斯御座候。 敬 具

昭和八年一月五日

滿洲派遣軍歩兵第三十一聯隊第九中隊

吉田仁太郎

岩手縣知事閣下

郷土の名を恥かしめざらむ

拜啓 今回は、御親切なる御慰問金御下し下され候段厚く御禮申上候。昨今は、殊の外寒氣
 厳しき折柄、知事閣下各位には愈々御健祥にて御活動被遊候趣、慶賀の至りに奉存候。降而小
 生儀、御蔭様にて日々元氣に、且つ愉快に勤務罷在候。今後一層奮勵し、奉公の實を擧げ以て
 郷土の名を恥かしめざらん事を期し居り候。之より派遣され此の滿洲の地にあるや一身一家を
 忘れて國家の重任に當る覺悟に候へ共、御後援を賜り候事は、殊に一層心強く感ぜられ、今後
 は別して凡ゆる私心を去り、専心國家の爲奮闘致し候へば、何卒家族の事は宜しく御依頼申上
 候。

東北對員の意原を謝儀せし

先は不取敢御禮まで。

衛兵所にて書き候故亂筆御許し下され度候

一月七日

滿洲派遣軍歩兵第三十一聯隊第九中隊

小笠原

一

上閉伊郡鶴住居村出身

岩手縣知事閣下

士氣愈々旺盛

謹啓 當師團主力之渡滿以來何吳と御後援を戴き、殊に今回は特に縣民御一同様よりの熱誠
 込めたる歳末酒肴料金八百圓也御送金に預り誠に難有陣中將兵の慰安と士氣の向上に裨益する
 處甚大なるを覺え申候。

別紙明細表の通り、御縣出身將兵一同へ分配致置候間御了承被下度候。

團下將兵一同以御蔭士氣愈旺盛、時局に善處して、皇軍就中第八師團の名譽を發揮せんことを肝銘致居候間不相變御後援被下度御願申上候。

先は不取敢以書面御禮申上度如斯に御座候。

尙關係各位特に岩手日報社及び岩手毎日社へよろしく御傳聲被下度御願申上候。 敬具

昭和八年一月六日

滿洲派遣 第八師團長 西 義 一

岩手縣知事石黒英彦閣下

山海關に於ける名譽の戦死者へ弔電

(一月六日附)

(戦死者名)〇〇〇殿ノ山海關ノ戦鬪ニ於ケル名譽ノ戦死ヲ悼ミ謹ミテ弔意ヲ表ス

岩手縣知事

【戦死者氏名】

軍曹 櫻井與八

一等卒 下道 專太郎

軍曹 小野寺 由助

一等卒 中平 林平

【出身郡町村】

上閉伊郡青笹村

九戸郡夏井村

東磐井郡門崎村

上閉伊郡栗橋村

(一月六日附)

山海關に於ける名譽の負傷者重傷へ見舞電報

(二月六日附)

名譽ノ御負傷遊バサレタル由、御見舞申上ク。折角御加療ノ上全快ノ速カナラムコトヲ祈ル。

岩手縣知事

【負傷者氏名】

上等兵 中村 治兵衛
 一等卒 吉田 清七
 軍曹 吉田 幸八
 一等卒 工藤 喜一郎
 一等卒 石崎 安五郎
 一等卒 佐々木 利喜藏
 同 安東 正

【出身郡町村】

岩手郡本宮村
 紫波郡見前村(後に死亡)
 和賀郡小山田村
 岩手郡瀧澤村
 下閉伊郡重茂村
 上閉伊郡鶉住居村
 東磐井郡松川村

同 佐藤 一夫
 一等卒 黒澤 喜藏
 軍曹 昆 喜藏

西磐井郡中里村
 上閉伊郡大槌町
 和賀郡立花村

山海關に於ける名譽の傷者へ見舞の電報 (二月六日附)

(負傷者)殿名譽ノ御負傷ナサレタル由、御見舞申上ク。 岩手縣知事

【負傷者氏名】

中 尉 干泥 亦吉
 上等兵 高橋 九平治
 伍 長 伊藤 文藏
 上等看護 佐々木 武志

【出身郡町村】

東磐井郡澁民村
 和賀郡笹間村
 上閉伊郡宮守村
 東磐井郡磐清水村

- | | | |
|-----|---------|-----------|
| 一等卒 | 大久保 千代吉 | 下閉伊郡 歙ヶ崎町 |
| 軍曹 | 今野 忠男 | 氣仙郡 赤崎村 |
| 軍曹 | 長岡 英夫 | 盛岡市 下厨川 |
| 一等卒 | 山田 慶之進 | 東磐井郡 長島村 |
| 一等卒 | 柴田 長松 | 和賀郡 横川目村 |
| 一等卒 | 村上 隆保 | 岩手郡 西山村 |
| 一等卒 | 小林 仁三郎 | 下閉伊郡 千徳村 |

父として光榮この上なし

拜啓 此度愚息千代吉儀山海關の戦鬪に負傷致候につき、いと御鄭重なる御見舞の電報を相受致し恐縮に奉存候。茲に謹みて御禮申上候。

今回の日支事變は、實に帝國の運命を賭すべき重大事變にして、此の新興日本の國運發展に寄與すべき戦鬪に加はることを得候事は父親として無上の光榮に存居候次第、伴の一命は既に陛下と祖國に捧げ居り候へば、些々たる輕傷位にては決して驚く等毛頭無之候。

此の上は一日も早く元の身体に復し、更に大なる御役に立ちて呉れよかしと只管冀ふのみに有之候。然るに、長官閣下より過分の御見舞を拜受致し、只々感激致すのみに御座候。此の一事を伴にも通じ此上とも一層軍務に精勵し粉骨碎身の意氣をもて護國の鬼と化すべき旨、本日申送り候次第此儀何卒御安心願上度候。右謹みて御禮申上候。敬 具

昭和八年一月七日

下閉伊郡 歙ヶ崎村 千代吉父

大久保 清右衛門

岩手縣知事 石黒英彦閣下

遙に東天を仰ぎて

告

謹みて新年の御喜びを申し上げます。

二伸 昨年は多大なる慰問金を被下誠に恐縮の至に存じます。茲に併せて深く御禮申上ます。

顧みれば、昨年四月以來懐かしき岩手否皇國を立ち出て茲に八年の新春を迎へ、遙かに東天を仰ぎて閣下の御健康を祈る。

八年一月元旦

滿洲派遣軍歩兵第三十一聯隊

第三大隊第十一中隊

伊 藤 政 益

岩手縣知事石黒英彦閣下

東洋の風雲逆睹し難し

謹 賀 新 年

遼西の第一線として萬里之長城に迫り、學良軍閥と相對陣して、新年を迎ふるに當り、轉た感慨無量なるもの有之候。去りし年月を顧みて、天壤無窮の皇室の偉大さに感泣すると共に、縣民各位の熱誠なる御後援と御同情の如何に吾等を勵まし、水火に入るも辞せざる慨を與へられ候點感謝の至りに不堪候。此の新年に當りて更に心を新にし益々奮勵努力、東北男兒の手腕を發揮して、縣民各位の御期待に添ひ奉らん事を期し居る次第に御座候。今や世界の潮流は滔々として逆流し、東洋の風雲逆睹し難きもの有之、國內の不況愈々深刻にして、内外共に多事多端なる時、閣下初縣民各位折角御健勝に渡らせらるゝ様遙かに奉祈上候。 敬 具

昭和八年一月元旦

歩兵第五聯隊乘馬小隊 荒谷晃市

岩手縣知事閣下

高らかに朗らかに早く萬歳を叫びたい

拜啓 昭和八年の年頭にあたりまして、謹んで新春の御慶を陣中の一角で、萬歳と共に、高らかに、朗らかに呼びます。そして閣下の御慶福をお祈り申上ります。不肖、陣中のお正月を今年で二回目を迎へました。實に軍人にのみ味ふ男性的な眞の快感を禁することは出来ません。愉快さと共に、又潑刺たる意氣で、爾今猶々奮闘致します。

先般、酒肴料を重ねて戴き、何んと御禮を申上ぐべきか、所詮筆不精な自分としてよい書き方は出来ません、只々確かと胸に刻まれたるものそれは感謝の二字であります。吾々の爲め力強き御援助下さる閣下の御心盡しに依つて、吾々は全く遙かなる戦地にあつても、心のまゝに

彼の暴戻あくなき敵匪と戦ふことが出来ます。私は、家の事など何も心配致しません、唯々自分は早く萬歳を叫びたいのであります。

右、年頭の御挨拶に併せ御禮まで。 敬具

昭和八年一月元旦

歩兵第三十一聯隊第九中隊上等兵 中山喜市

岩手縣知事石黒閣下

戦闘約四十回

謹賀新年

昨年中は、非常なる御後援を賜り、且つ愛國婦人會よりは多大の慰問品を賜はり、其上、知事閣下よりは歳末酒肴料として、多額の金員を御惠送下され、重ね／＼の御厚情に對し、感激

に不堪厚く御禮申上候。

昨年出動以來、連山の警備一ヶ月、北滿に於ける馬占山討伐に約四ヶ月、奉天警備約一ヶ月、東邊道討伐約一ヶ月、草倫支隊として大興安嶺の作戰約一ヶ月等にて、始ど席の暖まる暇も無之、年末に漸く錦州に到着致し候も、又々附近討伐の出動致し、近く又山海關方面へ出動の筈に有之候。この間頗る志氣旺盛にて戰鬪を續くること約四十回、岩手縣否東北健兒の眞價を發揮致し居り候につき御安心下され度候。以上の都合にて、御慰問の都度御返事を差上かね居り候段何卒御許し下され度候。岩手縣出身者は、當中隊に小生外三名有之、何れも元氣に活躍致し居り候に付御安心下され度候。先づは御禮申上度如斯に御座候。敬具

昭和八年一月九日

滿洲派遣第八師團騎兵第八聯隊

騎兵大尉 佐藤長之進

岩手縣知事石黒英彦閣下

愛國婦人會岩手支部長石黒市千代殿

電文

謹啓 先般は、熱誠なる御後援を賜り、誠に難有御禮申上げます。今後共愈々報國の念を勵くし、國民の赤誠を休して、目的を達成することを誓ひます。

昭和八年一月一日

滿洲派遣軍第八師團通信隊

堂屋吉郎

岩手縣知事石黒英彦閣下

恭賀新年

帝國の生命線を護りつつ、昭和八年の新春を、滿蒙の曠野に迎へ、遙に聖代の瑞雲を仰ぎ、併せて高堂の御萬を祈上候。

昭和八年元旦

岩手縣知事石黒英彦殿

滿洲派遣軍工兵第八大隊第一中隊

瀧口繁

彌榮の御年壽ぎまつる。

熱河の風雲急を告ぐるに當り、閣下並閣下の統率せらるる將兵各位の、御健勝と武運長久を祈り、以て皇國のため、一層の御奮闘を望む、銃後のこと呉々も御安心を乞ふ。(電報)

一月一日

石黒岩手縣知事

西第八師團長閣下宛

彌榮の御年壽ぎまつる。

熱河の風雲急を急ぐるに當り、貴官並に將兵各位の御健勝を祈り、切に皇國のため御奮闘を

希ふ。

一月一日

石黒岩手縣知事

滿洲派遣歩兵第四旅團長
第三十一聯隊長
工兵第八大隊第一中隊長
步兵第五聯隊長
野砲兵第八聯隊長
輸送看視隊長宛

一月六日 電報

御丁寧なる新年の御祝詞を賜り、將兵一同感激の至りに堪へず、益々奮勵せんとす。

野砲兵第八聯隊長

謹んで新年を賀す、激電感謝す、我等益々奮闘努力任務に邁進せん、御安心を乞ふ。

輸送看視隊長

岩

在滿歩兵第卅一聯隊上等看護兵佐々木武志君の書翰

矣

謹啓

唐突ながら一書拜呈仕り候。

残暑酷しき折柄知事閣下におかれましては益々御清榮の由慶賀至極に奉存上候。

滿洲も盛夏も過ぎ朝夕の涼けさ身に泌みる候と相成り候。

現在警備の任にあたり居る地北支那古北口は、萬里の長城の通過點にあたり、延々東西に流るゝ偉大なる長城の作る峯・山・谷を越えた美しき戦は澄み渡る初秋の大空と相俟つて異國の風景を遺憾く滿喫せしむるに十分に候。

時折討伐も御座候へども大した戦も無く誠に和やかな警備に候。

過ぎし昭和六年十一月渡滿以來三ヶ年北滿に、山海關に、或は此の度の熱河討伐に死力を盡

し居り候間、乍他事御休心被下度候。

却説、此の度突然御便り差し上げるのは實は小生——思ひ出せば昭和七年も除夜の鐘にくれて、内地ではお正月よ、歌留多會よと、賑やかに父母・兄弟集ひて壽ぐ正月二日より俄然火蓋を切つて落されたあの山海關の攻撃の折、彼我の喊聲天地に轟き、自動火器火を吐き我が驅逐艦より打ち出す砲弾は城壁に炸裂する第一線に於て、左手を小銃弾で貫通致され候然るに日支停戰條約なり全滿洲は、和やかな風に包まれ五色の旗、初秋の風に心地よくなびき居る今日、滿鐵より小生に見舞料として一金五十圓也被下候。

されど此れは小生の私すべきものに非ず、命はもとより國に捧げしもの、左手の負傷にして幸にも次の戦争より参加可能なりしことは、小生の此の上なき喜びにして、見舞料は、過分と在じ候。

斯様な金を私すべきは、心苦しく且逝きし戦友に對しても甚だ相濟まぬことに候へば、同封

にして御送附申し上候間貧困兒童救済に或は三陸大海嘯救民の一端に御使用被下度候まげても御使用被下候はば小生の歡喜これにまさるもの御座無く候。

輕少には存じ候へども、右記の事情御諒承の上御受納下され度候。

右御願ひ申上候。 草々

八月二十四日

古北口

佐々木武志

知事閣下

上等看護兵佐々木武志君の經歷大要

佐々木武志は、磐清水村字蒲澤農卯太郎の次男にして、明治四十三年八月二十二日生る。大正十四年三月、村立小學校高等科を卒業するや、直ちに家事に従事し、家業に努むる傍、後期農業補習學校に通ひ、又、青年訓練所にも入所したるが、性質温良にして人と争はず、よく

學業に勵みたり。十九歳の時、軍隊に服役し居たりし兄慶吉、満期除隊となり、歸郷するや、豫て望み居りし大工を志し、出で、村内の某大工に弟子入をなし、爾來忠實に習業に勵み居たりしが、やがて徴兵適齡に達し、検査の結果は、看護兵に合格し、昭和六年一月、弘前歩兵三十一聯隊に入營し、同年九月滿洲事變勃發するや、十一月滿洲に出動し、爾來各地の戰闘に参加し、或は守備に當り、十一月上等看護兵に昇進し、本年一月の山海關攻撃には奮闘力戰、遂に左手に負傷したるが、中隊に掛換の無き看護兵なればとて、後退を肯ぜずして、推して戰闘の終る迄踏み止りて任務に盡したるは、誠に美談とすべきなりとて、當時の岩手日報（二月十五日）には、血達磨三勇士として掲載せられたるが、此の事は、後に本縣關係二十六勇士の一人として、第八師團司令部編纂「滿洲事變美談集」に収録せらるることとなりたる旨、岩手日報八年七月二十七日は報じたり。其後、熱河討伐にも參加し、戰功を立てたるが、日支停戰成り今は同地古北口の守備の任に當り居れり。

家庭の状況

現戸主慶治に子無く、弟卯太郎を嗣子と定め、武志は、實に其の次男たり、兄弟六人あり、兄慶吉は、前記の如く兵役に服し、歩兵一等兵を務め、今は在郷軍人の籍にありて家業に努め、弟幸一は、本年徴兵検査に合格し、無抽籤入營を志願し、工兵隊に入營することになり居れり、父卯太郎は、農業を営むの外、大工の心得もあり、其の働きもなし來りしが、昨年夏、桑園手入の際、過つて樹より墜落し、負傷してより、身体元の如くならず、氣候の變り目などは所々疼痛甚だしく、随つて仕事も意の如く働けざる状態なるに、母は亦昨年秋より中風を患ひ、今尙藥餌に親み殆ど半身不自由の病態なれば、仕事を爲し得ざるは言ふ迄も無きところなるが、家族は武志を加へて實に十三人の多數にて、爲に生計甚だ容易ならざるを以て、村當局の取計ひにて現在にては軍事救護を受けつゝあるの状態なり、然れども家内一同よく和合し、健康者は言ふ迄も無く、身体不自由の兩親も、及ぶ限りの精出して家事に勵み居る有様は、村民の

ひとしく感心し、同情するところたり。

本人の入營前に於ける地方青年としての信用

前述の如く、家計不如意勝の爲、早くより専ら家事に力を致し、又十九歳の時より出で、大工の弟子奉公をなしたる爲、青年團等の公共の爲には積極的に盡力を致す餘裕を有せざりしも團の共同作業等には努めて出勤し、其の義務を果したりしかば、一般の風評も良く、同僚間の信用も極めて高かりき。

入營後に於て地方青年の指導

軍隊に入營後は、時々學校青年團等に文通し、兵營の状況感想等を報ぜしが、滿洲出勤後は別けて山海關戰鬥に負傷したる後は、屢々愛國の熱情を罩めたる手紙を寄せて青年の自覺發憤を促し、特に青年訓練所生徒に對しては、その修了者の實際の戰鬥に臨みて一段の光彩を放ちたれば、確實に修練に精出すべきことなどを勤め、青年指導の爲めに好感を與ふるところたり。

昭和八年十月二十七日印刷

昭和八年十月三十日發行

(定價金十錢)

編輯者兼
發行者

社團
法人

岩手縣教育會

岩手縣盛岡市久保田第二地割
外加賀野小路七八

右代表者 鈴木重男

盛岡市下厨川狐森一番地

印刷者 大澤權太郎

盛岡市下厨川狐森一番地

印刷所 盛岡少年刑務所

盛岡市内丸一地割一番地

發行所 岩手縣教育會

岩手縣教育課内
盛岡市
電話 二〇五九二番

352
459

終

